

日本王代

見

二

リ 5

5155

2



門 95
第 5155
卷 2

林書藏書

日本王代一覽卷之二目錄

九冊一葉天智天皇

在位十年

十四六葉天武天皇

在位十五年 白鳳十四。朱鳥一。

十四七葉持統天皇

在位十一年

十四九葉文武天皇

在位十一年 大寶三。慶雲四。

十四十一葉元明天皇

在位八年 和銅七。

十四十二葉元正天皇

在位九年 靈龜二。養老七。

十四十三葉聖武天皇

在位廿五年 神龜五。天平九。

十四十八葉孝謙天皇

在位十年 天平勝寶八。天平寶字二。

十四十七葉廢帝

在位六年 自天平寶字二。至八。

日本王代一覽卷之二目錄

稱德天皇

在位六年

天平神護二。神護慶雲四。

光仁天皇

在位十二年

寶龜十一。天應一。

桓武天皇

在位廿五年 延曆廿五。

平城天皇

在位四年 大同四。

嵯峨天皇

在位十四年 弘仁十四。

淳和天皇

在位十年 天長十。

仁明天皇

在位十七年 承和一四。嘉祥三。

文德天皇

在位八年 仁壽三。齊衡三。天安二。

日本三代一覽卷之二

天智天皇

舒明天皇ノ子ナリ。御母ハ齋明天皇ナリ。

始ハ中大兄皇子ト号ス。又葛城皇子トモ開別皇子

トモ申ス。中臣鎌足ト策ラメクラス。皇極ノ段ニ詳ナ

リ。孝德齋明二代ノ間。皇太子トナル。齋明ノ七年ニ大

唐并ニ新羅ヨリ百濟ヲ破リケレハ。百濟國ノ臣福信カ

請ニヨリテ軍勢ヲモヨホシ。齋明天皇土佐國朝倉

行幸。此時天智太子タルニヨリテ軍中ノ政ヲ攝シタマ

フ。山中ニ黒木ノ御所ヲ作り儉約ヲ用ヒ。民ヲ勞ヒシ

メス。朝倉木丸殿トハ是ナリ。又刈萱ト云フ所ニ關ヲス

エ。非常ヲ戒メ。出入ノ者ヲ改テ其姓名ヲ尋問テ往來

セシム。此所ヨリ。既ニ百濟ノ加勢ヲ出サントスルキ。其
年ノ七月ニ齋明崩御アリシカハ天智素服ヲ著ナガラ
政ヲ聞タマフ。其年ノ八月ニ將軍阿曇比羅夫河邊
百枝等ヲ大將トシテ。百濟ヲ救ハシメ。兵糧武具ヲ贈リ
遣ス。九月百濟ノ皇子豊璋ニ秦朴市田來津等五
千ノ兵ヲ添テ。百濟ヘ送り歸ス。福信出迎テ。豊璋ヲ百
濟王ト仰キ。日本ノ下知ヲウク。豊璋ハ久ク人質トナリ
テ。日本ニ居ルトイヘトモ。彼國大唐新羅ニ破ラレテ。
國王ナキニヨリテ。如此其後天智ハ齋明ノ喪ヲ奉ジ
テ。大和ヘ歸リタマフ。明年布三百端ヲ百濟王豊璋
ニ賜リ。矢十萬本。絲五百斤。綿千斤。布千端。韋千張。
稻種三千石ヲ。福信ニ賜フ。今年大唐并新羅ヨリ。高

麗ヲ攻ム。高麗加勢ヨリ日本ニ請フ。即加勢ヲ遣サル。
大唐ノ大將任雅相病死シ。龐孝泰ハ討死ス。蘇定方
ト云ル大將高麗ノ都ヲ攻圍ケルガユレモ利アラス
シテ引退ク。其明年又兵船兵糧ヲ調ヘ。數萬ノ軍
兵ヲ百濟ヘ遣サレ。新羅ヲ伐シム。此時豊璋ト福信
ト。中惡クナリテ。福信ヲ殺ス。既ニシテ新羅ノ兵進
テ百濟ヲ攻ム。大唐ノ大將孫仁師劉仁願劉仁軌水
陸ヨリ百濟ヘ攻來ル中ニ。劉仁軌カ率ル兵船百七十艘
白江口ト云フ所ニ陳ヲ張ル。日本ノ兵コレト合戦ス。大
敵ナレハ左右ヨリ夾ミ討シテ。敗軍シ。水ニ溺レテ死スル
者數ヲ知ラス。日本ノ大將朴市田來津齒ヲクイシハ
リ大ニ怒テ。唐兵數十人ヲ切殺シテ。其身モ討シメカ。

リケレハ豊璋ハ國ヲ捨テ高麗へ奔ル日本ノ軍兵ハ皆
歸陳ス百濟ノハ々多ク日本へ逃來ル者多シ其中
男女四百餘人ヲ近江國神前郡ニ移レ置ル又東國
へ二千餘人ヲ分チ遣フ其後大唐ヨリ劉德高トイ
ル使者來ル其歸ルトキニ守君大石坂部石積等ヲ
遣唐使トシテ發船ス大唐ノ高宗皇帝ニ逢テ歸ル
カクテ異國ト無事ニナリレカハ筑紫ノ内取々ニ城ヲ
構へ堤ヲ築キ番ヲスへ又大和國高安城讚岐國屋
嶋城ヲモ築カハ齋明天皇崩御ノ後六年ノ歷テ新
二陵ヲ築テ改メ葬ル此時ニテ天智イニテ即位ノ禮
ヲ行ハス猶太子ノ作法ニテヲハシケルカ此葬リ畢テ
後都ヲ近江ノ滋賀ニ遷ス明レハ七年春正月滋賀ノ

都ニテ即位シタマフ

八年ノ冬内臣中臣鎌足癡ニ卧ケレハ天皇自ラ其家
ニ行幸アリテ何ニテモ思フコトアラハ申スヘレト宣フ
鎌足對テ我何ヲカ申スヘキヤ唯葬禮ヲ輕クセシコト
ヲ願フ生テ國ニ益ナク死レテ何ノ人ヲ勞セシヤト申
ス時ノ人感セスト云コトナレ其後天皇又御弟天武ヲ
鎌足ノ家へ遣ハレ内大臣ニ任セラレ大織冠ト云官ヲ
賜テ中臣ヲ改テ初テ藤原姓ヲ賜ハル是内大臣ノ始
ナリ但レ此時左右ノ大臣ノ上ニ位ストナレ大織冠ハ
正一位ニアタル官ナリ藤原ハ鎌足ノ生レタル在所ノ
名ナリ其出ル取ノ名ヲトリテ姓トセリ其後幾程
ナクシテ大織冠薨ス歲五十或ハ五十六トモ云リ天

皇^{ミコ}ミ^カラ其家ヲ行幸アリテ歎^{ナガメ}キタマフ。天皇生レシキカ
カレク。學問ヲ好ミシカハ萬^{マン}ツノ政^{セイ}其外禮法儀式^{レイポフギシ}與
御代ニ至リテ能調^{ノボ}フレリ。後世^{コノサト}マテ。本朝中興ノ帝ト
申ス。

十年辛未ノ正月元日ニ御子大友皇子ヲ大政大臣
トシテ百官ヲ總テ萬機ノ政ヲ行ハシム。蘇我赤兄ヲ
左大臣トシ中臣金連ヲ右大臣トス。大政大臣ハ此時
ヨリ始ルヨリサキ。天皇御弟天武ヲ太子トス。天
武ノ后持統ハ天智ノ娘ナリ。大友皇子ノ妃十市皇
女ハ天武ノ娘ナリ。カタクシタシキナカナレドモ。大友
生レツキサカレク。入ラナツケ。其上學問ヲ好ミ。詩ヲ
作り文章ニ達シケレハ世ノ人皆心ヲ大友ニ寄せケル。

ヤ。天武疑ヒ畏ル、心アリ。其年ノ十月。天智不例ナリ
シカハ遺言ノ爲ニ天武ヲ召ス。蘇賀安麻呂ト云フ者
サ、ヤキテ言ケル。心アリテ返事申ケレヨ。天武ウナ
ツヒテ御前へ參ル。天智我疾甚シ。後ノ事汝ニ任ス
ト宣フ。天武某シ多病ナリ。願クハ大友皇子ヲ太子ト
シタマヘ。某シハ出家セシト云。天智其心ニ任スヘシト
云。天武即内裏ノ佛殿ニテ。髮ヲ剃テ僧トナル。勅ア
リテ袈裟ヲ賜ル。天武御前へ參リ。暇ヲ申シ。許容ア
リシカハ。即チ近江ヲ出テ。吉野へ赴ク。群臣皆守治マ
テ送リテ歸ル。時人申シケル。天武ヲ吉野へ遣スコトハ
虎ニ翼ヲツケテ放ツガコトト云リ。カ、リレ後ハ大友
皇子イヨク威強クナリテ。左大臣蘇我赤兄右大臣中

臣、金連等ノ群臣皆大友ノ前ニテ盟ヲナシテ、少モ違
變アルヘカラスト約束ス。ガクテ十二月、天智崩御ニ
シテ、在位十年。御歳四十六、或ハ五十八トモ云リ又一
説ニハ天智天皇、或時山科ヘ行幸アリテ、版リタマハス。
天ニ登リタマフニヤ。御履ハカリ留ルニヨリテ、其所ニ
陵ヲ立タリトイヘリ。明レハ壬申ノ年、大友皇子ノハカラ
ヒニテ、吉野ヘ入ラ遣ヒ。天武ヲ召カヘン。近江ニ置テ、其株
子ヲ見テ、コレヲ殺スベキカトノ沙汰アリレカ。八十市皇
女竊ニ是ヲ悲ニテ、文ヲカキテ魚ノ腹ニ納メ、吉野
野ヘ送り遣ス。天武コレヲ見テ、大ニ懼ル。村國ノ男依
ト云フ臣ヲ召シテ曰ク、近江ノ諸臣我ヲ害セシ事ヲ
謀ルト聞ク。汝等急キ美濃國ニ往テ、兵ヲ發シ、不破

ノ道ヲ塞ク。我モ又マカテ進發セント云フ。其後天武
大伴志摩ヲ使シ、大和ノ留守高坂王ヲカタラハ
シケル。同心セケルニヨリテ、急ギ事ノアラハレヌキニ
シテ、吉野ヲ出タマフ。俄ノ事ニテ、御車エナケレバ、天武
ハ馬ニ乘、御后持統ハ輿ニ乗ル。御子草壁皇子、忍壁
皇子以下、近臣二十餘人、女孺十餘人、徒歩ニテ供奉ス。
路次ニテ、獵師二十餘人來テ、御供ニ候ス。又伊勢ノ貢
米ヲノセテ、通ル馬五十疋ヲ得テ、其米ヲハ捨テ、歩
入ヲ乗セシム。此路次、山城國ヲ過ルトモ、流矢來テ、天
武ノ北肩ニアタル。其所ヲ矢背ト云。山中ニ逃入テ、鞍
馬ヲ繫ク。取テ鞍馬山ト号ス。其後大野ト云フ所ニ
到テ、日暮山中暗シテ、道ヲ知ラス。家ヲコホチテ、松明

トシテ是ヨリ進ニテ伊賀國ニ到ル中山ニ入時一當
國ノ軍士等數百人來リ參ルツレヨリ伊勢國越テ
國司三宅連ガ軍兵五百人ヲ得テ鈴鹿ノ関ヲ塞ク天
武ノ子高市皇子大津皇子ハ皆近江ニアリケルカ潛
カニ逃出テ伊賀伊勢ノ内ニテ天武ニ參會ス此時天
武跡大川ノ邊ヨリ適ニ天照大神ノ拜セラル去程ニ
村國ノ男依美濃國ノ兵三千人ヲ催シシテ不破ノ関ヲ
塞クヨシ注進シケレハ天武高市皇子ヲ不破へ遣ヒテ
守フシム又東海道東山道へモ使ヲ遣ヒ軍ヲ催シム
天武持統モロトモニ伊勢國桑名郡ニ暫ク休息セ
ラル世俗説ニハ天武吉野國櫛ニテモ志摩國ニテモ
美濃ノ洲股ニテモ大友ノ兵ニ逐ヒテ難議ニ及ブト云

ヒツタニノレト日本紀ニハヨク侍ラズ其後天武桑名持
統ヲ留置其身ハ不破へ赴ク尾張國司小友部鉦鈞
二万ノ兵ヲ率テ從フ天武高市皇マノヲ和斷ト云フ
取ニ居ラシメテ諸軍ヲ下知セラル天武ハ野上ト云フ
所ニ御座スガハルトコロニ大和國ニテ大伴吹負ト云フ
者軍ヲ起シ天武ノ方トナリテ取々ニテ攻戰ヒ利
ヲ得テ既ニ奈良ニテ進テ入り近江へ押寄トス大
友皇子方々へ軍兵ヲ遣ヒ防クトイヘトモ利ヲ失
テ引退ク既ニシテ天武ノ大將村國男依等數萬
兵ヲ率テ近江へ向フ皆赤キ符ヲツケタリ大友ノ大
將境部藥上息長横川ニ戰テ藥ヲ切タ又鳥籠山ニ
テ大友ノ大將秦友足ヲ斬リ安河ニテ土師牛島ヲ

生捕ル。即チ進テ勢多ニテ來リシカ公大友自ラ群臣ヲ率ヒテ橋ノ西ニ陣ス。互ニ鐘鼓ヲウチテ矢亂シ。及テ雨ノゴトシテ大友ノ大將智尊ト云者勝レタル勇士ニテ防平戰ヒケレバ敵進ムコトアタハス。既ニレテ智尊討死ス。大友ノ軍散走ル。男依橋ヲ越テ粟津ニ至ル。大友ノ大將大養連谷塩手等皆討死ス。大友皇マノ行ハキ。取テ山前ニ隱レテ自ラ縊レテ死ス。時三十五歳ナリ。其頸ヲ取テ天武ノ御座所ヘ送ル。高市皇子近江ヘ來リテ罪ノ輕重ヲタシレテ右大臣中臣金連ヲ切リ殺シ。左大臣蘇我赤兄等數輩ヲ流罪セラハ壬申ノ乱トハ是ナリ。

四十代

天武天皇

天智ノ弟ナリ。大友皇子討レテ後伊勢ノ

國ヨリ大和ニ到リ。内裏ヲ造リ。淨見原宮ト号シ。即壇場ヲ設ケ。即位セラハ壬申ノ乱ニ勲功アル者ヲ褒美セラハ高麗新羅皆使ヲ獻レテ即位ヲ賀ス。白鳳二年始テ大藏經ヲ寫サレム。三年對馬國ヨリ白銀ヲ奉ル。是日本ニテ白銀出ル始ナリ。此代ニ正月踏歌トテ内裏ノ庭ニテ男女ヲドリウタフコト也。又同キ十五日群臣御新ヲ進スルコト。六月晦日ノ祓。又大嘗會ノ悠紀主基モ五節ノ舞姫モ皆始レリ。諸社ノ祭モ始ルコト多シ。又朝廷ノ法度品々多ク定メラル。群臣ノ位四十八階ヲ定メラル。裝束ノ色ヲモ其位ニヨリテ定メラル。又人ノ姓氏ノ品ヲモ分チ定メラル。

白鳳十三年。大地震アリテ山クツレ川涌出テ諸國ノ官舎御藏并ニ神社寺塔多ク壞レ人民六畜多ク死ス伊豫國ノ温泉ハツアレテ出ズ王佐國ノ田地五
十餘万頃没シテ海トナル伊豆國ニハ俄ニ二ツノ島出
來ル其外在位ノ間怪異多ク

朱鳥元年九月ニ崩ス 在位十五年年号、白鳳十
四年朱鳥一年

四十一代

持統天皇女帝 天智ノ娘天武ノ后ナリ壬申ノ乱ニ天武
從テ伊勢國ニテ赴キ桑名ニ居テ乱平テ後大
和ノ都ニ皈ル軍中ニモ即位ノ後モ天武ノ輔テ政ニ
預ルコト多シ天武崩シテ後持統政ヲ聞持統ノ産

ル子ヲ草壁皇子ト云天武ノ時ヨリ太子タリ別腹ノ
子ヲ大津皇子ト云其器量人ニ勝レ文才アリテ能
詩賦ヲ作ル天武愛シテ政ヲ聞シテ天武崩シテ後大
津皇子竊ニ謀叛ノ志アリ事アラハレケレハ持統ト
草壁太子ノハカラヒニテ天武ヲ殺ス其時モ臨終ノ詩
ヲ作レリ時ニ二十四歳トナシカクテ二年ヲ歷テ草
壁太子薨セララル時ニ二十八歳其明年持統遂ニ天
皇ノ位ニ即ク群臣三種ノ神器ヲ奉ル大赦ヲ天下
ニ行ヒ其上京中畿内ノ年老タル男女五千餘人
ニ稻ヲ賜フ人毎ニ二十束ツナリ又無縁ノ者并
ニ疾アル者貧キ者ニ稻ヲ賜フ高市皇子ヲ太政
大臣トシ丹比島ヲ右大臣トス其外八省百官等

皆是ヲ置群臣一俸祿ヲ增加ヘ皇女并ニ命婦ニ
モ位ヲ授皇女ヲ内親王ト云フコトモ又女人ノ位ニ
ス、ムコトモコレヨリ始メ天皇年々吉野へ行幸アリ
又アルレキ。伊勢國へ行幸アルヘシト沙汰アリシカハ
中納言三輪高市麻呂農業ヲ妨シコトヲ慮テシキ
リニ諫メ申セドモ許容ナク遂ニ行幸アリ伊賀伊
勢志摩ノ年貢ヲ減シ老人ニ稱ヲ賜フ又藤原ノ内
裏ヲ造テ都ヲ遷サル其後高市皇子薨セラル天皇
イツレノ皇子ヲカ太子トスベキト沙汰アリ葛野王
ト云ル臣ノ申ニヨリテ草壁太子ノ子珂瑠王ヲ太
子ニ定メラル其後天皇不例ナリシカハ在位十一年
ニテ位ヲ珂瑠太子ニ讓ル文武天皇是ナリ持統ニハ

太上天皇ノ尊号ヲ奉ル存生ノ内ニ位ヲ讓ルコトハ皇極
ニ始ルトイヘトモ太上天皇ノ尊号アルコトハ持統ヨリ
始レリ
四十二代

文武天皇 天武ノ孫草壁太子ノ子ナリ。祖母持統ノ
讓リヲウケテ即位ス

元年藤原宮子媛ヲ夫人トス藤原不比等ノ娘ナリ木
比等ハ大織冠ノ子ナリ後ニ淡海公ト云レハ是ナリ。
一年役小角ヲ伊弉嶋ニ流ス小角ハ役行者ノ事ナリ。
此人怪キ術ヲ知テ大和國葛城山ニ住テ鬼神ヲ召ソ
カヒ其下知ニ從ハサル神ヲハ是ヲ捕ヘ縛ル。韓國廣足
ト云者行者ヲ師トシ其術ヲ習ヒケルガ怪キコトニテ。

人ヲ惑トモス由。奏聞スルニヨリテ。行者ヲ流罪セララル年ヲ
歷テ赦免セララル

四年。道昭ト云ル僧病死ス。是ヲ火葬ス。日本ニテ火
葬ノ始ナリ。此僧若キ時。入唐シ學問シテ。飯朝ノ後元
興寺ニ住ケルカ。天下ヲ廻リアリキ。方々ノ津濟ニ船ヲ
設ケ橋ヲ造ルコト多シ。山城國宇治橋モ此僧ノ始
テカクル所ナリ。同年藤原不比等等ニ詔シテ。律令
撰シハ律六卷令十。卷アリ。律ハ法度ノ定メナリ。令
ハ政務ノ下知ヲキテナリ。此二部ハ後世ニテノ重寶ナリ。
大寶元年正月元日。天皇大極殿ニ出御アリ。御門ノ
正面ニ鳥形ノ旗ヲ立。左ニハ日ノ旗。青龍旗。朱雀ノ旗ヲ
タテ。右ニハ月ノ旗。玄武ノ旗。白虎ノ旗ヲタテタリ。百官

朝拜シ。異國ノ使者ハ旗左右ニ並居タリ。後世ニテ大
禮アルトキニ。其儀式如此トナシ。同月大納言大伴
御行卒ス。右大臣ヲ贈ラル。是贈官ノ始ナリ。二月丁
巳。大學寮ニテ。始テ釋奠ヲ執行ヒテ。孔子ヲ祭リタマ
フ。是ヨリ年々春秋ヲコタルコトナシ。五月粟田真人
ニ節刀ヲ賜リ。遣唐使トス。相從フ屬官多シ。七月。
左大臣多治比島薨ス。歳七十八。二月十月。太上天皇持統參河國ニ御幸ス。十一月。
大和ニ歸リ。十二月崩御マレニス。
三年正月。朝禮ヲヤメラレ。太上天皇ノタメニ齋ヲ設ケ
ラル。三品刑部親王ニ。知大政官事ト云官ヲ授テ。
國政ヲ執レ。此人ハ天皇ノ叔父ナリ。四月。右大臣阿

倍御主人薨ス 十二月ニ持統天皇ヲ飛鳥岡ニ火葬ス帝王火葬ノ始ナリ

慶雲元年正月。石上麻呂ヲ右大臣トス。七月遣唐使粟田真人歸朝ス。田二十町米千石ヲ賜リテ勞ハル此人大唐ニ見テ。則天皇后ニ見テ。麟德殿ニテ宴ヲ賜ル。文才器量勝レテ。衣冠シテ參内セル威儀神妙ナリト。異朝ノ書ニモ記セリ

二年。諸國飢饉疫病シケレハ。醴酒藥ヲ賜リテ是ヲ救ス。四年五月。讚岐國人錦部刀良。筑後國人許勢形見等ニ衣服并ニ塩米ヲ賜ル。是天智ノ御時。百濟ノ加勢ノ中ニアリテ。唐人ニ生捕レ。四十餘年異國ニアリテ。粟田真人ニ從テ歸朝セリ。六月。天皇崩御

レタマフ。御生レツキユルヤカニシテ仁愛ナリ。學問ヲ好ミ詩ヲ作リ。又射藝ニモ達シタマフ。御歳ワヅカニ二十五。在位ノ始四年八年号ナシ。大寶三年。慶雲四年。合テ十一年ナリ。孝德天皇ノ大化ヨリ年号始ルトイヘドモ。其以後或ハ年号ヲ立或ハタテラレス。大寶ヨリ以後八年号絶ルコトナシ

四十三代

元明天皇 女帝 天智ノ娘。持統ノ妹。草壁太子ノ妃。文武ノ母ナリ。文武崩レテ其子聖武幼少ナレハ。文武ノ遺言ニヨリテ。元明即位ス。其明年ノ春。武藏ノ國ヨリ和銅ヲ獻スルニヨリテ。即チ年号ニ用ラル。和銅元年三月。石上麻呂左大臣トナル。藤原不比等右大臣トナル

二年三月。陸奥越後ノ夷叛キケレハ。將軍ヲ遣フ。是ヲ平ク。五月。新羅使金信福來テ貢物ヲ捧グ。藤原不比等是ニ對面ス。信福日本ノ大臣ニ逢コトヲ悦テ拜ス。

三年三月。都ヲ平城ニ遷ス。此遷都ノコトハ文武ノ末ノ年ヨリ其沙汰アリヨ、ニイタリテ内裏成就セル。藤原不比等興福寺ヲ平城ニ造ル。平城ハ奈良ナリ。

四年。太安麻呂古事記三卷ヲ作ル。

五年。始テ陸奥ノ國ヲ分テ出羽國ヲ置。

六年。丹波ヲ分テ丹後トシ。備前ヲ分テ美作ヲ置。日向ヲ分テ大隅ヲ置。同年諸國ノ風土記ヲ作ラシム。

此記ニハ國々ノ郡郷山河原野。并ニ其土産草木

鳥獸ニ至ルミテシル。其上其國々々ニテ云傳タル

昔ノ物語ニテ。書ノセタリ。又信濃ト美濃ト。堺道

セクケハシク。往來難議ナルニヨリテ。始テ木曾路

ヲ開テ通ラシム。

七年。大和國ニ孝行ノ者二人アリ。詔シテ其人身ヲ

終ルミテ公使ヲ免ス。惣シテ此比ハ孝子順孫義夫

節婦ノキコヘアルモノヲハ慶美セラハル。

八年。天皇位ヲ御娘元正ニ讓リ。大上天皇ト稱ス。

在位八年。年号和銅。

四十四代

元正天皇 女帝 元明ノ娘。文武ノ跡ナリ。元明ノ讓リテ

ケテ即位。年号ヲ靈龜ト号ス。

靈龜二年。高麗人千七百九十九人。武藏國遷
其所ヲ高麗郡ト号ス。同年。多治比縣守ヲ遣唐
使トス。藤原宇合ヲ副使トス。吉備大臣。此時ハイ一タ
下道真備ト云テ。二十三歳ナリ。阿倍仲麻呂十六歳
二人共ニ學問ノ爲ニ縣守ニ從テ入唐

養老元年三月。左大臣石上麻呂薨ス。歲七十八九月。
近江國へ行幸。山陰山陽南海道ノ國司參リツトヒ
テ歌舞ス。其ヨリ美濃國へ行幸。東海東山北陸道
ノ國司來リツトヒテ。雜伎ヲ奏ス。美濃國當耆郡
多度山ニ泉アリヨレニテ手ヲアラヒ面ヲアラヘハ皮
膚ナメラカニナレリ。又痛ミアル所ヲアラヘハ夕夕
チ愈。又是ヲ飲或ハ是ニ浴スレハ白髮モ黒クナリ。ヌケタ

レ髮モ再生シ。眼精モ明ニナルトイヘリ。天皇此トコロへ
行幸イリテ。此泉ハ老ヲ養フヘシト仰セラレ。即年号ヲ
養老ト号ス。俗ニ謂ル養老ノ瀧是ナリ。
二年五月。越前ヲ分テ能登トシ。下総ヲ分テ安房トシ。
十二月。多治比縣守。大唐ヨリ歸ル。同年。右大臣藤
原不比等ニ命レテ。重テ律令各十卷ヲ修セシム。
四年五月。一品舍人親王。日本紀二十卷ヲ作テ奉ル。
神代ヨリ持統天皇ニテテ。詳ニ記セリ。舍人ハ天武ノ
子ナリ。八月。右大臣藤原不比等薨ス。歲六十二。太
政大臣正一位ヲ贈ラレ。文忠公ト謚ス。淡海公是ナリ。
舍人親王ヲ以テ。知太政官事トシテ。政ヲ行ハシム。
今年。大隅ノ隼人。陸奥ノ蝦夷謀叛シケレハ。東西へ將軍

ヲ遣シテ...

五年正月長屋王ヲ右大臣トス

明經博士并ニ才藝

アル者ニ物ヲタニフ 十二月太上天皇 元明 崩ス歲

六十一

八年正月天皇位ヲ聖武ニ讓ル太上天皇ト号ス在

位靈龜二年養老七年合テ九年

四十五代

聖武天皇

文武ノ太子ナリ母ハ藤原夫人宮子ト云フ

贈太政大臣藤原不比等ノ娘也文武崩スルトキ聖武

幼少ナルニヨリテ即位セズ元明ノ代ニ十四歳ニテ太子

トナリ元正ノ代ニ政ヲアツカリ聞タニフコニイタリテ

讓リテウケテ位ニツク

神龜元年二月右大臣長屋王左大臣トナル 十月紀

伊國玉津嶋弱浦ニ行幸

四年勅使ヲ諸國ヘ遣シ國司ノ政ヲ改メシム又百官ノ

善惡ヲ紀ス

五年渤海使者來テ貢物ヲ奉ル渤海ハ高麗ノ部類ナ

リコレヨリサキ高麗國ハ大唐ニ滅カル其ワツカニノコル

者ヲ渤海國ト号ス

天平元年正月左大臣長屋王逆心ノ聞ヘアリケレハ式

部卿藤原宇合等ヲ遣シテ長屋王カ家ヲ圍ニ又舍人

親王等ヲ遣シテ其罪ヲ問シ長屋王自害ス其妻子

皆殺サル長屋王ハ大武ノ孫高市皇子ノ子ナリ

八月藤原光明子ヲ立テ皇后トス是モ不比等ノ娘

ナリ天皇公不比等ノタシニ外孫ナルニ又婿ナレバ藤
氏ノ繁昌此時ヨリ起レリ

二年正月百官ヲ宴シ仁我禮智信ノ五字ヲ札ニカキ
是ヲトラシメ其字ニヨリテ物ヲ賜フ事差アリ

二月釋奠勅使ヲ大學東宮ニ遣シ博士等ヲ勞ヒ物ヲ
賜ル 四月始テ施藥院ヲ立テ民ノ疾アルモノヲメグム

四年多治比廣成ヲ遣唐使トス
六年藤原武智麻呂右大臣トナル不比等ノ長男ナリ次

男ヲ房前ト云此時參議ノ官ニテ政ニアツカル其三男
ヲ式部卿宇合ト云其四男ヲ左京大夫麻呂ト云

七年三日多治比廣成大唐ヨリ歸ル此ハ玄宗皇帝
ニ謁シ名ヲ異朝ニアラハスホト道真備大臣モ此時版

朝シ書物其外様々ノ器ヲ持テ飯レリ又孔子像ヲ
九哲ノ像ヲモ持テ參レリ在唐ノ間二十年ニ及ベリ今年

夏ヨリ冬ニ至ルニテ天下豌豆瘡ト云モノハヤリテ病
死スル者多シ俗ニ是ヲモカサトモ云今ノ疱瘡ナルベ

シ 十一月一品舍人親王薨ス歲六十太政大臣ヲ
贈ラルル八年南天竺僧善提林邑國僧佛哲來朝ス

同年從二位葛城王ニ橘姓ヲ賜リ名ヲ諸兄ト改ム
橘姓是ヨリ初ル

九年四月參議藤原房前卒ス歲五十七 七月
參議藤原麻呂卒ス歲四十三 同月右大臣藤原

武智麻呂薨ス歲五十八其病中ニ正一位ヲ授ケラレ
左大臣ニ任セラル 八月ニ參議藤原宇合卒ス歲四

十四此人ハ皆不比等ノ子ニテ。天皇ノ舅ナリ兄弟四人。同年ニ皆モカサニテ薨逝。武智麻呂ノ家ハ南ニアルニヨリテ南家ト云。乃前ノ家ハ北ニアルニヨリテ北家ト云。次男ナレトモ此人ノ子孫繁昌シテ。今ニ至ルニテ攝家ハ皆此モナリ。宇合ハ式部卿ヲ兼ルニヨリテ式家ト云フ。此人ハ文武ノ才アル人ニテ名ヲ異國ニテ躡セリ。麻呂ハ左ノ京大夫ヲ兼ルニヨリテ京家ト云。後世藤原氏ノ未世ハ甚タ多シトイヘトモ皆此四家ヨリ出サルハナシ。天皇ノ御母藤原大夫人宮子。久ク疾ニカ、リテ人ニ逢コトナシ。此年ノ冬。皇后ノ御方ニテ。僧正玄昉ヲ一目御覽シテ。快ク笑ヒタミ。天皇トモ久々ニテ對面アリ。上下目出度ト悦ブコ

レニヨリテ綿布ヲ玄昉ニ賜ル。十年正月。御娘阿倍内親王ヲ太子ニ立ラブル。孝謙天皇是ナリ。天皇皇子一人アリトイヘトモ世ニヨリテ如此。橘諸兄ヲ右大臣ニ任セラレ。十二年八月。大宰少貳藤原廣嗣上表シテ。時ノ政ノ得失ヲ申シ。下道真備ト僧正玄昉世ヲ乱ル間コレヲ除ト言上シ。九月遂ニ筑紫ニテ謀叛ス。ニヨリテ。大野東人ヲ大將軍トシ。紀飯麻呂ヲ副將軍トシ。諸國ノ軍勢一萬七千人ヲ添。又佐伯高人阿倍虫麻呂ニ。四千人ヲ添。相共ニ廣嗣ヲ討シ。伊勢太神宮へ勅使ヲ立ラレ。奉幣シ祈請セラレ。取ムノ關原へ軍兵ヲ遣シ守シ。廣嗣ハ肥前ノ國遠珂ノ郡

二城ヲカニヘ板橋ト云取ニ出張ス 十月大將軍
大野東人板橋河ニテ廣嗣ガ万騎ノ兵ト合戰廣
嗣ガ前手ノ兵ホヲ編テ船トレ河ヲ渡ントス常人
虫麻呂大弓ヲ放テ射ケレハ敵進テアヌハス常人等
六千餘人ヲ帥テ進ニ廣嗣ニ言テ懸テ呼ケレハ廣嗣
馬ニ騎テ進出テ勅使ハ何人ソト問フ常人某々ト
答ケレハ廣嗣馬ヨリ下テ我本ヨリ朝廷ヘ叛カス只
真備ト玄昉トニ怨アリト云常人然ハ何トテ大軍
ヲ起レ官軍ニ向テ戰ヤト云廣嗣答ルコトアヌハス
テ退ク廣嗣自ラ五千入ヲ帥ヒ其ノ弟綱手ニ五千入
ヲ添ヌ又多胡古麻呂ニ兵ヲ添テ三手ニ分レテ進ム
廣嗣カ一手先進テ一手ハイニ夕到サル内ニ官軍急

ニ攻ケレハ廣嗣戰負ニ船ニ乘テ異國ヘ逃トスル処ヲ肥前
國松浦郡長野村ニテ官軍ノ内安倍黒麻呂ト云
者廣嗣ヲ生取テ則是ヲ斬ル綱手モ同ク殺サレ或説
ニ廣嗣駿馬ニ騎テ海ヘ飛入テ其靈タリヲナスニヨリテ松
浦ニ社ヲ立テ神ト崇ト云リ廣嗣公宇合ガ子ナリ
廣嗣乱ノ内ニ天皇伊勢ノ國ヘ行幸アリ大神宮ヘモ
奉幣シ給テ美濃伊賀ヲ歷テ山城ノ國相樂郡ニ都
ヲ遷シ内裏ヲ作ル是ヲ恭仁宮トイフ廣嗣ガ同類ノ
罪ヲ定メ東人飯麻呂常人虫麻呂等ニ位ヲ授ケラレ
十四年近江國甲賀郡紫香樂宮ニ行幸其ヨリ右大
臣橘諸兄ヲ伊勢大神宮ヘ遣サル
十五年正月ニ太宰府ヨリ腹赤ノ魚ヲ獻ル是ヨリ

毎年元日ノ節會ニ此魚ヲ用ラル 五月右大臣橘
諸兄左大臣ニ任ス 十月紫香樂官ニ行幸僧行
基ヲシテ天下ヲ勸進セシメ盧舍那ノ金銅大像ヲ
作ル

十六年春都ヲ攝津國難波ニ遷ス 十一月紫香
樂官ノ寺ニ始テ大佛ヲ立ツ天皇自ラ其繩ヲヒク
太上天皇 元正 七御幸アリ

十七年正月行基ヲ大僧正トス 八月紫香樂官ノ
大佛ヲ奈良ニ遷ス

十八年玄昉死ス此僧入唐シ歸朝ノ時經論五千餘
卷并ニ佛像ヲ持テ來ル天皇紫袈裟ヲ給テ榮寵ア
リシ九沙門ノ行ニソムクアアルニヨリテ人皆惡ム此時

筑紫ニウツサレテ死ス或說ニハ廣嗣ガ怨靈ニ害セラル
ト云リ

十九年太上天皇 元正 不例ニテ明レハ二十年四月六
十九歳ニテ崩御其追善ノ爲ニ法華經千部ヲ寫ス
八月釋奠ノ服器及儀式ヲ定メラル

二十一年正月天下殺生ヲ禁ジ行基ヲ召テ大菩薩
ノ号ヲ授ラル 二月行基病死歳八十此僧少キ時ヨリ
諸國ヲメクリアリキ所々ニ橋作堤ヲ筑ク其留リ住
スル處ニハ必道場ヲ立タリ畿内ニモ四十九處アリ天皇
甚歸依シ給フ陸奥國司百濟王敬福始テ黄金ヲ貢
當國小田ノ郡ヨリ出ル處ナリ 四月天皇東大寺ニ
行幸北面シテ佛像ニ向ヒ自ニ寶奴ト称ス皇后太子

群臣皆伺候ス。橘諸兄ヲシテ。佛像ニ向ヒ。陸奥ノ國ヨリ。黄金ヲ出ス。一ヲ告グ。コレヨリサキ。天皇大佛ノ料ニ黄金ヲ異國へ求ントス。然ルニ奥州ヨリ始テ奉リシカハ大ニ喜ヨシカ。三月又奥州ヨリ黄金九百兩ヲ奉ル皆大佛ノ料ニ用ヒス。同月左大臣橘諸兄正一位ニ叙シ。大納言藤原豐成ヲ右大臣ニ任ゼラル。七月天皇位ヲ太子ニ譲リ。太上天皇ト称ス。天皇在位。神龜五年。天平二十年。合テ二十五年。

四十六代

孝謙天皇女帝 聖武ノ娘ナリ。母ハ光明皇后藤原不比等ノ娘ナリ。聖武男子ナキニヨリテ。孝謙ヲ太子トス。吉備公ヲ師トシテ學問シ給フ。聖武ノ讓ヲ受テ即位ス。

天平勝寶元年。八幡大神ノ詔宣ニヨリテ。大和國平郡ニ。神宮ヲ作ル。東大寺ノ八幡是ナリ。天皇モ太上天皇モ光明皇后モ。東大寺へ行幸アリテ。僧ヲ聚メ經ヲ讀シム。二年。藤原清河大伴。古麻呂吉備。真備ヲ遣唐使トス。四年四月。大佛開眼供養。大皇東大寺へ行幸。百官供奉其儀式。元日ニ同シ。天皇寺ヨリ飯ル時。大納言藤原仲麻呂。カ田村ノ家ニ入給ヒ。其處ヲ御在所トセラル。仲麻呂寵臣タル故ナリ。六年正月。遣唐使大伴。古麻呂吉備。真備歸朝ス。藤原清河ハ大唐ニ止テ不歸。古麻呂奏聞シケルハ。大唐ニアリシ時。正月元日。玄宗皇帝出御アリテ。諸國ノ使者ニ對面ス時。西ノ一ノ座。吐蕃國ノ使者。東ノ一ノ座。新羅ノ

使者ナリ。日本ノ使者ハ西ノ二ノ座タルベシ。大食國ノ使者
ハ東ノ二ノ座タルベシト定メラル。其時古麻呂イカリテ。新
羅古ヨリ今ニノタル。日本ヘ從ス。イカテカ日本ノ使
者ヲ彼ガ下ニ置ヤト。ハカラス申ケレ。大唐ノ將軍兵
懷實其色ヲ見テ。日本ノ使者ヲ大食國ノ上ニ置キ。東ノ
一ノ座トス。新羅ノ使者ヲハ西ノ二ノ座ニ置ケリト云。
此時唐僧鑑真從テ來朝ス。古麻呂吉備皆位ヲ進
メラル。

八年二月左大臣正一、位橘諸兄逆心アリト申スモノ
アリ。天皇許容セズ。諸兄ヲソレテ。官職ヲ辭メ致仕ス。
五月太上天皇聖武崩ス。歲五十六。甚佛法ヲ好ヨリ。
落飾シテ。法諱ヲ勝滿ト云。帝王ノ髮ヲソル。ハ聖武
ヨリ始メル。太上天皇ノ遺言ニテ。道祖王ヲ太子トセ
ラル。是ハ天武ノ孫。新田ノ皇子ノ子ナリ。

天平寶字元年。橘諸兄薨ス。歲七十四。并手大臣ト号
ス。三月太子道祖王ヲステ。其家ニ歸ラシム。右大
臣藤原豐成。帝ノ遺言ナレハ如何ト申シケレトモ。天
皇ノ心ニカナハサルニヨリテ如此。四月親王ノ内。孰カ
太子トスベキト沙汰アリシニ。豐成等申ス旨アリトイ
ヘトモ許容ナク。藤原仲麻呂カ申スニヨリテ。大炊王
ヲ太子トセラル。此モ天武ノ孫。舍人親王ノ子ナリ。
五月天皇藤原仲麻呂ガ田村ノ宮ニ遷リシニ。仲
麻呂ニ紫微内相ト云ヘル官ヲ授テ。内外ノ武官ヲツカ
サトラス。其作法大臣ノ如シ。豐成ハ仲麻呂カ兄ニテ。

右大臣タレトモ仲麻呂寵臣タルニヨリテ其權威甚
フルヒケレハ豊成ト不和ナリ此二人ハ不比等孫武
智麻呂カ子ナリ此時橘諸兄カ子ニ奈良麻呂ト三者
アリ仲麻呂ガ權柄ヲホレイニニスルコトヲ怒リ大伴
古麻呂等ヲカタラヒ仲麻呂ヲ殺シ道祖王ヲトリタ
テ天皇ノ位ヲトリカヘントハカル此事豊成風聞我仲麻
呂ヲ教誨スベシ乱ヲラコスベカラスト止ム其内ニ早事
露レシカハ仲麻呂大ニ怒テ則奏聞シ奈良麻呂其外
同類ヲトラエテ盡ク殺ス道祖王モ害セラレ豊成モ
此事知ナカラ奏聞セサル罪カロカラストテ筑紫へ流
罪セラレル明年八月天皇位ヲ太子大炊王ニ讓ル孝謙
ヲハ高野天皇ト申ス在位天平勝寶八年天平寶

字二年合テ十年

四十・七代

廢帝 天武ノ孫舍人親王ノ子ナリ藤原仲麻呂カ
ハカラヒニテ太子ニ立ツ

天平寶字二年八月孝謙ノ讓ヲ受テ即位仲麻呂
ヲ大保ニ任セラル大保ハ右大臣ナリ此時勅アリテ
云ク仲麻呂其曾祖大織冠ヨリコノカタ國ノ佐トレ
テ天下無事ナリ其ヒロク民ヲ惠ノ美ナル古ヨリ並
ナレ又悪人ヲ押へ乱ニ勝ツ功アリトテ其姓名ヲ
藤原惠美押勝ト給ハル俗説ニ孝謙押勝ヲ御覽シテハ三
ツラワセ給フユニ惠美ト云ハ誤ナリ
十二月大唐ニ安祿山乱ヲコレ世ヲ奪フ由日本へ
聞ユルニヨリテ安祿山本意ヲトケスニハ若日本ノ海

上へヤウカ、ヒギタルへキモ、ハカリカタレ。平々ニ其用心ヲスベレト下知ス

三年六月、御父舎人親王ヲ謚ノ崇道、盡敬皇帝ト云
四年正月、諸國へ使ヲ遣メ、其國ノ風俗ヲ見セシム
同月、天皇及孝謙相謀テ、押勝ニ從一位ヲ授ケ、大師
ニ任セラフ。大師ハ太政大臣ナリ。天皇及孝謙、度々押
勝カ家ニ行幸アリ。六月、光明皇太后崩ス。歲六
十。八月、勅スラク藤原不比等ハ其功高ク、自朝廷
ノ外戚ナレハ齊ノ太公カ例ニ准メ、近江ノ國十二郡
ヲ以テ、是ヲ封メ、淡海公ト号ス。淡海ハ近江ノ
事ナリ。又押勝請ニヨリテ、武智麻呂房前並ニ
太政大臣ヲ贈ラル

五年、都ヲ近江國保良ニ遷ス

六年二月、押勝ニ正一位ヲ授ケ、頃日弓削道鏡ト云ル
僧、孝謙ノノハ近ク侍テ寵愛甚シ。天皇然ルヘカラスト
諫メラル。此ニヨリテ、二帝ノ御中不和ニナリケレハ、孝
謙保良ノ都ヨリ奈良ヘ歸ル。天皇モ又奈良ヘ歸ル。其
後孝謙落飾、法諱ハ法基ト云。五位以上ノ者ヲ召テ曰
我ハニ出家ス。然レトモ國家ノ大事、賞罰ノ一ニハ、非自
決スヘシ。其外ノ事ハ當今ノ帝ニ任ス

七年、高麗使王新福來テ貢ヲ奉ル。押勝ガ宅ニテ宴ヲ設ケ、
八年九月、押勝權サカリナリト云ヘトモ、道鏡カ常ニ
孝謙ノ御前ニ侍テ、其恩寵已ガ上ニアルコトヲ憤
リテ、常ニ心モトナクヲモヒテ、秘ニ太政官ノ印ヲ用

テ。軍兵ヲ召アツメ用心シケレハ孝謙是ヲ聞テ少納言山村王ヲ遣メ其印ヲ取收シム。押勝其子訓儒麻呂ヲレテ此ヲ奪シム。此時坂上田麻呂勅ヲ承テ訓儒麻呂ヲ射殺ス。押勝又矢田部老ヲレテ甲曾ヲ著シ馬ニノセテ山村王ヲラヒヤカス。紀船守勅ヲ承テ矢田部老ヲ射殺ス。コ、ニライテ押勝ガ官位ヲ削ル。押勝其同類ヲ召ツレテ近江國へ走ル。藤原良繼等ノ官軍追懸取ムニテ合戦ス。高嶋三尾崎ニテ佐伯三野ナト云ル官軍押勝子真光等ト。午刻ヨリ申刻マテ戦テ官軍少ツカレケル所へ勝原藏下麻呂新手ニテ馳來ル。二野モ又進ム。其外ノ諸大將モ水陸ヨリ攻カ、リケレハ押勝カ兵皆亡ヌ。其妻子ト共ニ船ニテ

ラントスル所ヲ官兵石村々主ト云者押勝ノ生捕テ討斬其首ヲ京へ送ル。真光等以下其徒黨三十餘人皆一所ニテ殺サル。又道祖王ノ兄塩焼王モ押勝同類ノ聞ヘアルニヨリテ同害セララル。押勝カ兄豊成其罪ヲタメテ呼出レ本ノ如ク右大臣トス。又道鏡ヲ大臣禪師トシテ政ヲ行レム。十月孝謙山村王等ヲ遣シ内裏ヲ圍ム。當今ノ帝モ押勝ト同類ニテ。孝謙ヲ害スル謀アリトテ。帝位ヲヒラロレ。淡路國へ流ス。在位六年ナリ。孝謙ノ天平寶字ノ年号ヲ用ヒテ。別二年号ヲ立ス。明年淡路國ニテ崩セラル。實ハ弑ラルナルヘ歳三十三。淡路ノ廢帝トハ是ナリ。

稱徳天皇女帝 即孝謙ナリ廢帝ヲ押ノケ再位ヲ踐其
重祚ヲ稱徳ト云ナリ。皇極齊明。帝ニテ二号アル例
ナリ

天平神護元年十月道鏡ニ太政大臣禪師ノ位ヲ授
テ文武百官ヲシテ拜賀セシム 十一月右大臣從一
位藤原豊成薨ス。歲六十二

二年正月藤原求手右大臣ニ任ス吉備真備ヲ大納
言トス 十月道鏡ニ法王ノ位ヲ授ク藤原求手ヲ
左大臣トシ吉備真備ヲ右大臣トス。此人再入唐禪
學ノ譽アルニヨリテ。微賤ヨリ次第ニ登庸レテ。大臣ニ
イタル世ニ謂ユル吉備大臣是ナリ

神護景雲元年二月釋奠天皇自大學寮へ行幸ア

リ 二月越智泰澄死ス。此越前白山ヲ開ク人ナリ

七月僧勝道始テ下野國ニ荒山ヲ開ク。日光山是ナリ

二年七月大學助教膳臣大丘奏聞レケル。大唐ノ

天子孔子ヲ尊テ文宣王ト謚ス。然ラハ日本ニテモ其

例ニ任セ。文宣王ト申サント請フ。則勅許セラレ

十一月始テ春日神社ヲ大和國三笠山ニ立テ。武雷

命天兒屋根命齊主命姬大神ヲ祭ル

三年正月道鏡内裏ノ西宮ニ居ル大臣以下皆出仕

二月左大臣求手が宅ニ行幸。右大臣吉備が宅ヘモ

行幸アリ 五月天皇ノ妹不破内親王ハ塩焼王カ妻

ナリ。塩焼殺サレテ後其子氷上志計志麻呂ト盛談

シ。天皇ヲノロヒケル由露顯ニヨリテ。内親王ハ京中ヲ

逐出サレ。志計志麻呂ハ上佐ノ國へ流サル。九月大
幸府ノ阿曾麻呂ト云者。道鏡ガ威勢ノ強キヲ見テ。コビ
ヘツラヒ。宇佐八幡ノ謠宣ト稱シテ。道鏡ヲ帝位ニ即シ
メ。天下泰平ナラント云。道鏡悅テ。天皇ニ申ス。天皇道
鏡ヲ愛スルコト甚レトイヘドモ。帝位ノコトハ私ナラ
ヌコトナレバ。宇佐へ勅使ヲ遣シ。其神託ニ仕セテ。央
セント宣フ。道鏡然ルヘシト申ス。天皇和氣清麻呂
ヲ啓シ。白ク。八幡大神夢ノ告アリ。汝ヲ勅使トシテ。宇佐
ニ遣スヘシ。能敬テ神託ヲ聞テ。既レト云。清麻呂御前
ヲ退クトキ。道鏡人ヲレリソケテサ。ヤキケルハ。此度ノ
勅使ハ。我ニ帝位ヲ讓ラルヘキヤ否ト。八幡大神ニ問ル。
トユロナリ。其心得ヲ以テ。神託ヲ言上スヘシ。汝ガ返事

ニヨリテ。我即位セバ。汝ヲ大臣トナシテ。國ノ政ヲ任スヘ
シ。若返事悪クハ。重キ罪ニ行フヘシトテ。眼ヲイガラカ
シ。手ヲカケテ。ヲトス。清麻呂宇佐へ參詣シ。是ハ國
家ノ大事ナリ。縱ヒ謠宣アリトモ。率余ニハ信レガタシ
願クハ。一ノ不思議ヲ示シタニヘト祈念シケレハ。大神忽
チ長三丈ハカリノ形ヲ現シテ。影向アリ。其光リ滿月ノ
コトシ。清麻呂伏拜シテ。仰ギ見ルコトアタハス。神託ニ
曰ク。我國ノ天ツ日嗣。神代ヨリ代々皇胤ノ外。臣トシ
テ。伺フヘキニアラス。況ヤ無道ノ者ヲヤ。汝既ニアリ。一
ニ申スヘシ。道鏡ヲ畏ル。コトナカレト云。清麻呂元來
忠節ノ者ナレハ。神託肝ニ銘ジテ。都ニ既リ參内ス。道鏡
御前ニ侍テ。椅子ニヨリカ。リ。清麻呂ヲ呼テ。神託イ

カニト問清麻呂少モ諷ラハスアリノニ、ニ奏聞ス天皇
モイ一興ナク思召道鏡大ニ怒テ眼ノ色ハ血ノコトク
赤ナリ其面或ハ青クナリ。或ハ赤クナリ大息ツイテ清
麻呂ヲ睨ミ申シケルハ彼已ガ心ヲ以テ神託ヲ詐リテ
申スナルベシクセゴトナリ。死罪ニ處スヘシ。天皇死罪ニ
テハイカニトナダクター（公道鏡怒テ清麻呂カ名ヲ
穢麻呂トツケカヘテ其足ノ筋ヲタチテ。大隅國へ流ス
路次ニテ清麻呂ヲ殺スヘシト。道鏡ハカリケレトモ其
折節雷雨甚クシテ。タメラフウチニ勅使來テ死罪
ヲオタム清麻呂足ノ筋ヲタレテ。行歩叶ハサリシガ
宇佐ハ幡へ參詣シケレハ不思議ノコトモアリ
テ足ノ筋忽チナラリテ。行歩本ノゴトクナリタリト

イヒ傳タリ藤原百川ト云ルハ清麻呂カ忠節ヲアハ
レニテ。備後國ニ其私鑿アリケル分テ清麻呂カ配所
（贈ル）同年十月大宰府ノ學校五經ハカリテ讀習
三史ナキニヨリテ。所望ノ由奏聞スルニヨリテ。史記漢
書。後漢書ニ國志晉書ヲ賜ル

四年二月天皇河内ノ由義宮ニ行幸アリ。道鏡非常
ノ怪キ食物ヲ奉ル。四月都へ還御アリシカ。六月ヨリ
不例ニテ。様々御藥ヲス、ムレトモ。驗ナシ。群臣謁見
スルコトナシ。道鏡強ホシヒニナリ。人皆アヤブム。八
月。天皇遂ニ崩御アリ。年五十三。年号天平神護二年。
神護景雲四年。合テ六年前ノ十年ヲ合テ凡在位十
六年ナリ。左大臣藤原ノ永手。右大臣吉備真備等相談

シ皇子ノ内誰カ即位セシムベキト云。群臣申ストコロ
區々ナリシニ藤原百川ト藤原良繼ト策ヲ合セ。未
手ヲスノテ白壁王ヲ立テ太子トシ道鏡ハ稱徳天
皇ノ陵ノ下ニ居シヲ太子及未手等ガハカラヒニ下
野一流シ藥師寺ノ別當トス世ヲ慕ントセル惡人ナ
トモ先帝ノ御恩深キ者ナルニヨリテ死罪ヲ免ストナ
シ年ヲ歷テ道鏡下野國ニテ病死ス和氣ノ清麻呂
ヲ都ヘ呼取ス

四十九代

光仁天皇

御名ヲ白壁王ト申ス天智天皇ノ孫施

基皇子ノ子ナリ聖武稱徳ニ仕ヘテ大納言ニテ昇進
ス稱徳天皇崩御ノ後未手并百川等ガハカラヒ

ニテ思ノ外ニ即位時ニ歳六十二。抑壬申ノ乱ニ大友
皇子討レテ天武即位アリシカハ天智ノ子孫全衰テ
微々ナリシガコニ至リテ天武ノ王孫ハ却テ絶テ天
智ノ嫡流王統ヲ繼リ寶龜元年十月從一位左大
臣藤原未手ニ正一位ヲ授クヨリサキ橘諸兄惠
美押勝正一位ニ進ム。未手ヲ加テ二人ノ外ハ存生
ノ内ニ見ルハナシ此以後ハ皆贈位ナリ。十一月御父
施基皇子ヲ田原皇子ト謚ス。十二月未手ニ山城
國ノ内ニ百町ノ郷ヲクニハル
二年二月左大臣未手ノ薨ス。年五十八淡海公ノ孫
房前ノ子ナリ。二月右大臣吉備真備致仕ス。大
中臣清麻呂ヲ右大臣トス藤原良繼ヲ内臣トス

十一月大嘗會ヲ行フ。參河國ヲ由機トシ、因幡國ヲ
須岐トス。其儀式ユ、シク備ハレリ。凡大嘗會ハ帝王
一代ニ一度行ハル、大礼ナリ。

三年。渤海國ノ使者、壹萬福來テ貢物ヲ奉ル。其表
无礼ナリトテ、壹萬福ニ責問ル、旨アリ。様ト謝スル
ニヨリテ、返簡ヲ賜ル。天皇ノ后ヲ井上内親王ト
云フ。其産ル子ヲ他古ノ親王ト云フ。立テ太子トス。天皇
ノ第一ノ皇子ヲ山部親王ト云フ。參議藤原百川山
部ヲ太子トセシクホツレテ、謀ラメクラスカ、ルトヨロ
ニ井上皇后。天皇ト申悪クナリテ、潛ニ天皇ヲノロ
ヒ他古太子ヲ早ク弔位セシメントハカル事顕レケレ
ハ。百川奏聞レテ、皇后及ヒ他古太子ヲラヒラロス。其

後、何レノ皇子カ太子トスベキト沙汰アリ。百川第一
ノ皇子ナレバ山部親王ニカルヘシト申ス。天皇ハ皇女
酒入内親王ヲ立ント宣フ。藤原瀆成ハ山部ハ母イヤレ
ケレハイカ、ナリ。第二ノ皇子、稗田親王然ルヘシト云フ。
百川太子ノ位ハ母ノ貴賤ニヨラスト云。天皇タメラヒテ
決セス。百川齒ヲクヒシハリ、殿前ニ立テ、四十餘日ノ
間、少モ睡ス。太子ノ定ルヲ聞ス。ハ退出スベカラスト。
堅ク思ツメタル氣色ナレバ、天皇モ止コトラ得スレ
テ許容シ。山部ヲ立テ太子トス。時ノ人百川ガ二
心ナキコトヲ感ス。年ヲ歷テ井上皇后モ他古
親王モ皆卒ス。井上ノ怨靈龍トナリタリト云傳タリ。
六年十月吉備大臣並死。歲八十二十一月陸奥

國ノ夷起リケレハ鎮守將軍大伴駿河麻呂其根
城ニテ攻破リ是ヲ平ゲテ功アルニヨリテ勅使ヲ遣
シテ褒美セララル

八年正月内臣藤原良繼ヲ内大臣トス其位右大
臣ノ次ニアリ此年佐伯今毛人ヲ遣唐大使トス小
野石根ヲ副使トス今毛人路次ヨリ疾ト稱ジテ行
カス石根假ニ大師トナリテ發船ス孝謙ノ時藤原
ノ清河大使トナリテ入唐シ彼地ニ留テ歸ラザルニ
ヨリテ度々迎船ヲ遣ハサルトイヘトモ唐帝コレヲ愛
メカヘサス此度モ勅書ヲ涇河ニ賜リ岐ルヘキノ旨
仰セ遣サルサレドモ終ニ無~~ク~~シス清河公房前ノ子
ナリ阿倍仲麻呂公元正ノ時吉備大臣ト同ク入唐

シ彼地ニテ秘書監ト云フ官ニ升リ名ヲ晁衡ト改メ文朝
衡トモ云晁卿トモ云李白魏萬王維包佶ナトイヘル名
高キ輩ト交シムスフ其後歸朝シケルトキ明州ノ津
ニテ日本ノ方ヲ望ミ天ノ原フリサケミレハ春日十九日
ノ山ニ出シ月カモト詠シケルトナン海上ニテ風ニ逢フテ
水ニ没ストイヒツタヘタリ又或説ニ仲麻呂モ清河モ
同ク歸朝セシカ風ニ逢テ安南國ヘ吹ツケラレ其ヨリ
又清河同道シ大唐ヘ到リ七十餘ニテ病死ストイヘリ
清河モ大唐ニテ病死セリ 九月内大臣藤原良繼
薨ス此人ハ宇合ノ子ナリ神務カ乱ニ軍功アリ
九年正月侍從五位以上ノ者ヲ召テ宴ヲ設ケ被物ヲ
賜ル 三月大納言藤原魚名ヲ内臣トス 十月遣

唐使第二船第四船歸朝ス。小野石根ト。唐使趙寶英等カ乗タル第一ノ船ハ風波ニ逢テ海ニ没ス。惣ジテ遣唐使ノ發スル時ハ大使船副使船判官船主再船ト。大船四艘ツ、遣サル

十年正月藤原魚名ヲ内大臣トス

五月大唐ノ使孫興進秦尙期等來テ進物ヲ獻ス。内裏ニテ饗應ヲ設ラル。中納言石上宅嗣其挨拶ヲナス。宅嗣又オスクレタル人ナリ。其後右大臣大中臣清麻呂館ハ唐ノ使者ヲ招キ。饗ヲ設ク。綿三千屯ヲタメハリテ歸朝セシム。七月參議中衛大將藤原百川卒ス。歲四十八天皇モ太子モ甚惜タメフ。此モ宇合子ナリ。十一年正月唐使高鶴林并ニ新羅ノ使金蘭孫等來

ル宴ヲ設ケ祿ヲ賜ル。二月陸奥國夷伊治此麻呂乱ヲ作シテ。按察使參議紀廣純ヲ殺シテ。國中ノ官物ヲ掠ム。大伴益立紀古佐美等ノ官兵ヲ奥州ヘ遣サ。又出羽ヘモ官兵ヲ遣シテ守ラシム。諸國ヨリ兵糧ヲ多ク陸奥ヘ運シム。九月藤原小黒麻呂ヲ奥州討手ノ大將トス。夷賊ヤウヤクハヒコリテ。タヤスク亡ヒス。

天應元年二月米十萬斛ヲ陸奥國ヘ贈遣ス。三月天皇不例。四月位ヲ皇太子山部親王ニ讓テ即位セシム。桓武天皇是ナリ。使ヲ伊勢大神宮ヘ遣シ即位ヲ告グル。六月右大臣大中臣清麻呂致仕ス。内大臣藤原魚名ヲ左大臣トス。八月藤原小黒麻呂奥州ノ賊ヲ平ケ歸京。正三位ヲ授ラル。紀古佐美等モ軍功ヨリ

賞ヲ蒙ル。大伴益立功ナキニヨリテ。位ヲ奪ハル。十二月。光仁天皇崩ス。歳七十二年。号寶龜十一年。天應一年。在位合十二年。

五十代

桓武天皇

光仁第一ノ子ナリ。山部親王ト号ス。母ハ

高野夫人ト云。高野乙繼カ娘ナリ。天皇娘稱徳ニ任テ。從五位下。大學頭ニ任ス。光仁即位ノ後。四位ノ侍從トナリ。中務卿ニ任ス。

寶龜四年ニ太子トナル

天應元年ニ即位。御弟早良親王ヲ太子トス

延暦元年閏正月。因幡守水上川繼謀叛。内裏へ夜討セシトハカル事。隠レテ伊豆國へ配流セラレ。川繼ハ天

武ノ曾孫塩焼王カ子ナリ。母不破内親王ハ淡路國へ流サレ。光仁崩レテ。諫職ノ内ナルニヨリテ。死罪ヲ宥テ。流罪ス。月卿雲客ノ内。其同類親類タル者皆流罪セラレ。五月。宇佐八幡宮神託アリテ。大菩薩ト稱スト云。六月。左大臣藤原魚名罪アリテ。官ヲマヌラレ。筑紫へ下向ス。其後赦免アリテ。歸京シテ薨ス。藤原田麻呂右大臣トナル。此比ハ左大臣ニテモ。右大臣ニテモ。一人アリテ。左右並置ス。大納言タル人。大臣ニ副テ政ニ預ル。

二年三月。右大臣藤原田麻呂薨ス。歳六十二。子宇合ノ

七月。藤原是公右大臣トナル

十月。交野ニ行幸シテ。鷹狩アリ

三年五月。山城國乙訓郡長岡ノ地ヲ見立。六月ヨリ
内裏ヲ作り。十一月。天皇奈良ヨリ長岡へ行幸ア
リ。加茂明神へ奉幣シ。都遷ノコトヲ申サル。此神ハ山
城ノ地主タルニヨリテナリ。

四年八月。天皇奈良へ行幸。早良太子。右大臣藤原是
公。中納言藤原種継。長岡ノ留守タリ。天皇常ニ遊獵
ヲ好テ。政ヲ太子ニ任セララル。種継ハ天皇ノ近臣ニテ。
内外ノコトヲ執行ス。長岡へ都遷ノコトモ。種継ガ進
メ申ストコロナリ。或時太子奏シテ。佐伯今毛人ヲ參
議トス。種継。佐伯氏ハ參議ニ昇ル家ニアラスト申テ。コ
レヲサヘト。メントス。太子甚憤リ怨テ。事ニフレテ種
継ヲ殺サント奏ス。天皇從ス。コレヨリ政ヲ太子ニ任セ

ス。太子甚恨ム。此時天皇ノ奈良へ行幸スルヨキ折
節ト思ヒ。大伴種人。大伴仲良ヲ日暮カタニ種継ガ家
へ遣シ。子ヲハレム。此時都遷ノミギリニテ。家造リモ
マハラニテ。種継燭ノ下ニアリケルヲ窺テ。矢ヲ放ツ。
アヤミタス。種継カ身ヲ射通シテ。即チ死ス。天皇大ニ
驚キ。急奈良ヨリ長岡へ歸テ。種人。竹良ヲ捕テ。奈
鑿シ。太子ノ母爲ニギレテカリケレバ。逆鱗アリテ。太子ヲ
淡路へ流ス。太子斷食シ。路次ニテ死ス。淡路ニテ葬禮
ヲ行フ。種人。竹良等。罪ニ。其外太子ノ方ニ侍ル者。
流罪セララル。種継ニ公正一位。左大臣ヲ贈ラル。甚悼痛
ミタマフユヘナリ。其後早良ノ靈タマリヲナス由ニテ。崇
道天皇ト謚ス。勅使ヲ天智天皇ノ陵ト。光仁天皇

ノ陵ト遣シ太子ヲ廢ルコトヲ申サル 十一月御
子安殿親王ヲ太子トス

五年正月從三位右衛門督坂上苅田麻呂卒ス歲五
十九此人弓馬ニ達シテ内裏ノ守護タリ。田村麻呂カ
父ナリ

六年十月交野ニ行幸。大納言藤原繼繩カ別業ヲ
御座所トス。繼繩ヲ勅使トシテ。大神ヲ交野ニ禱ラ
シム。光仁天皇ヲ奉祭ラル

七年正月太子元服。大納言繼繩中納言紀船守御
冠ヲ加ヘ奉ル。二月。藤原百川カ子緒嗣十五歲ニ
テ。御前ニライテ元服。百川カ舊功ヲ仰セ出サレ。御落涙
アリテ。様々ノ賜モノアリ。位ヲ授ケ。封戸ヲ賜フ

七月前右大臣大中臣清麻呂薨ス。歲八十八 十二
月奥州ニ夷賊起リケレバ。參議紀古佐美ヲ征夷大將
軍トシテ。奥州ヘ遣サル。坂東ノコトハ汝ニ任スト。仰セラ
ル。此年僧最澄始テ比叡山延壽寺ヲ開テ。根本中堂
ヲ建。最澄ハ傳教大師ナリ

八年奥州夷賊ハビコリテ強クナル。六月大將軍紀古
佐美諸軍ヲ率テコレヲ討。副將池田真牧。安倍墨繩等
先戰テ敗軍ス。夷賊勝ニノル。官軍大ニ破テ。或ハ殺サレ
或ハ川ニ溺テ死スル者二千。人誦美ハワヅカ八十九人
討レタリ。九月古佐美等歸京ス。大納言繼繩等勅ヲ
承テ。太政官ニライテ。其罪ヲ糾明シ。奏聞シケレ。古佐
美ハ赦免セラレ。真牧墨繩官ヲ奪ハル。右大臣藤原

是公薨ス歳六十三 武智麻呂

九年二月藤原繼繩右大臣トナル 二日東海東山諸國ニ詔シテ兵糧十四万斛ヲ調ヘ太宰府ニ仰テ鉄鼓二千九枚ヲ造シム奥州ノ夷ヲ徼セシタメナリ 八月英紫飢饉ス其民八万八千余人ニ物ヲ賜テ賑シメクム 十年正月百濟俊哲坂上田村麻呂等ヲ東海東山遣シテ軍士ヲエラシメ武具ヲ調ヘシム 七月大伴弟麻呂ヲ征東大使トシ俊哲田村ヲ副使トシテ奥州ヘ遣ハサル

十二年正月大納言藤原小黒麻呂左大辨紀古佐美并ニ僧賢憬等ヲ遣シテ山城國葛野郡宇太村ノ地ヲ見セシム此地ニ都ヲ遷スヘシトテ内裏ヲ造ラシメ都

ノコトヲ賀茂明神ヘ言テ天智天皇山科ノ陵光仁天皇田原ノ陵ヘモ申サレ 六月新都ニ殷富門美福門安喜門偉堅門藻壁門神賢門陽明門達智門談天門都芳門等ヲ諸國ヘ分テ築テ是ヲ造ラシム 九月菅野真道藤原葛野麻呂ヲ新都ヘ遣シテ百官ノ宅地ヲ分タシム

十三年十月葛野新都ノ内裏成就スルニヨリテ天皇行幸アリ此所左蒼龍右白虎前朱雀後玄武四神相應ノ地ニテ其上山川麗シク四方出入ノ道尤便ヨケル公百王不易ノ都タルヘシトテ平安城ト号ス又其長八尺計ナル土偶人ヲ作り鉄ノ甲冑ヲキセ鉄ノ弓矢ヲ持シメ帝都ヲシモラシメ君後世ニ都ヲカヘントスルコト

トアラフハ守護神タルヘシテ誓ヒテ東山ノ上ニ立テ西
ムキニ是ヲ埋ム。今ノ將軍塚是ナリ。サレハ國家ニ變
アルトキハ此塚鳴動スト云ヒツタヘヌリ。

十五年正月。片川野ニ遊獵。天皇常ニ獵ヲ好テ京外
畿内取々年々行幸。七月。右大臣藤原。繼繩薨ス。歲

七十。豐成ガ子ナリ。此大臣文武ノホアリ。續日本紀。
菅野真道ト此大臣ト。二人ノ撰スルトコロナリ。中納言

紀古佐美ト神王トシテ大納言トシテ。政ヲ行ハシム。此々
東寺ヲ建ラル。此年藤原伊勢人ト云者。鞍馬寺ヲ創

ム。又勤操ト云ル僧。始テ法華八講ヲ執行フ。
十六年四月。紀古佐美卒ス。十一月。從四位下。坂上

田村麻呂ヲ征夷大將軍トス。久ク奥州ニアリテ軍勞
アルユヘナリ。

十七年七月。坂上田村麻呂。清水寺ヲ造ル。八月。大
納言神玉右大臣トナル。

十八年二月。從三位。民部卿。和氣清麻呂卒ス。歲六十
七。

十九年三月十四日ヨリ。四月十八日ニ。富士頂自ラ
燃テ盡ハ煙暗ク。夜ハ火光天ヲ照ス。其聲ハ雷ノゴト

ク。灰ノ下ルユト雨ノゴトシ。山下河水皆紅ナリ。十一
月。田村麻呂ニ命ジテ。諸國ニ分散スル。奥州夷賊ヲ

黥檢セシム。
二十年二月。監試對策アリ。菅原清公題ヲ出シテ是

ヲ問テ。文章生ノオヲ試ム。清公。菅原。丞相ノ祖父也。

陸奥國ノ夷賊高丸ト云者達谷窟ヨリ起リ駿河國
清見關ニテ攻上ル征夷大將軍坂上田村麻呂節刀ヲ
騾リ進發ス高丸退テ奥州へ引籠田村續テ奥州へ
攻入合戦シ神樂岡ト云所ニテ高丸ヲ射殺ス又惡路
王ト云賊ヲモ平ク奥州悉クシツニル田村瞻澤郡ニ八
幡宮ヲ建其弓矢等ヲ納メ又達谷窟ノ前ニ山城ヲ
鞍馬寺ヲ似セシ多門天ノ像ヲ安置ス十一月田
村歸京シケレハ天皇ノ仰ニ云ク近年數度奥州乱ケル
ニ田村今度悉ク退治ス其功大ナリトテ從三位ヲ
授ラル

二十一年春又田村ヲ奥州へ遣ニ瞻澤ヲ造ラシム
七月ニ田村歸京ス夷ノ張本大墓公盤具公ト云者
降参シケルヲ召連テ來ル此二人ヲ免シ其徒黨ヲ
シツメヨト言令歸國セシムベキカレ田村申サレケ
レトモ畜類同前ノ夷ナレ恩ヲシルヘカラストテ二
人トモニ斬罪セララル天皇神泉苑ニ幸シ右大臣神
王ト議シテ藤原緒繼ヲ參議ニ任セララル歲廿九天皇太子
群臣ニカタラク彼歲ワカクシテ公卿ニ列ス人アヤシ
ムベシレカレドモ彼父百川カ功ニアラスハ我即位シ
カタレ故ニ其恩ヲ報テ如此ト宣フ

二十三年遣唐使ヲ發ス藤原葛野麻呂大史タリ石
川道益副使タリ菅原清公判官タリ朝野鹿取録事
タリ四人共ニ才學アリ此時傳教モ暇ヲ給テ清公ト
同船入唐ス僧空海モ求法ノ爲ニ私ニ葛野カ船ニ乘

テ入唐ス空海ハ弘法大師ノコトナリ。葛野ス或ハ賀能
モ云フ。去年發船ストイヘトモ葛野ガ船難波津ニテ
風ニ逢テ擱スルユヘニ二年延引

二十四年春天皇不例ニヨリテ諸醫藥ヲ獻スレトモ
驗ナシ諸社ヘモ祈念セラル又早良太子ノ爲ニ手ヲ淡
路ニ建諸國ニ庫ヲ立年貢ヲ納テ其國忌及奉幣ノ
料トス彼怨靈ヲナグサメラル 六月遣唐使等皈朝

七月葛野參内從四位ヨリ從二位ニ叙セラル菅清公モ
六位ヨリ五位ニ進ム副使道益ハ明州ニテ卒る贈位ア
ル傳教モ皈朝ス天台ノ法ヲ相傳シ各ヲ異朝ニ殘セリ
弘法ハ逗留シテイニ夕皈ラス 八月傳教ヲ内裏ヘ
奉佛像及經論ヲ奉ル 九月傳教ニ勅シテ高雄ニテ

始テ灌頂ヲ行ハシム

二十五年三月天皇崩ス。歲七十年号延曆在位二十
五年

五十一代

平城天皇

桓武ノ太子ナリ。御諱安殿ト云母ハ皇

后藤原乙牟漏ト云内大臣良繼カ娘ナリ。此帝ハ學問
ヲ好テ詩ヲモヨク作りタニ。桓武崩シテ即位。御弟
神野親王ヲ太子トス

大同元年五月大納言藤原内麻呂ヲ右大臣トス諸道
ノ觀察使ヲ始テ置ル皆參議ノ官ヲシテ兼シム

六月外祖内大臣良繼ニ正一位太政大臣ヲ贈ラル
八月弘法皈朝真言ノ法ヲ傳ヘ來ル橘逸勢ト云學

生モ。此時辰朝是ハ能書ニテ。名ヲ異國ニ殘セリ
二年正月遣唐使ノ持來レル物ヲ。筑前ノ香椎宮并ニ
諸山陵へ奉ラル。香椎ハ神功皇后ノ廟ナリ。山陵ハ代
々帝王ノ御墓ナリ。四月近衛府ヲ左近衛府ト改
メ。中納言坂上田村麻呂ヲシテ右大
將ヲ兼シム。是左右大將相並始ナリ。禁中警衛其外
武官ノコトハ皆大將ノサハキナリ。大臣ニ相對セル重職
ナリ。八月神寶并ニ唐國ノ物ヲ伊勢大神宮ニ奉
天皇ノ弟ニ伊豫親王ト云ルアリ。桓武ノ寵子ナリ。此
年十月藤原宗成カ勸メニヨリテ謀叛ノ志アリ。右大
臣内麻呂是ヲ知テ奏聞シ。宗成ヲ捕へ白狀シケレハ。

左中將安倍是雄。左兵衛督巨勢野足ニ官兵ヲ指添
親王及其母藤原夫人吉子ヲ捕テ川原寺ニ押籠飲食
ヲ断ケレ。親王モ吉子モ藥ヲ吞テ死ス。宗成流罪セラ
ル。大納言藤原雄友ハ親王ノ外舅ナルニヨリテ伊豫へ流
サル。其外解官ノ者多シ
三年五月出雲廣貞ト云ル官醫。大同類聚トイヘル書ニ
百卷作テ献ル。十一月大嘗會ヲ行ル。去年行ルケレ
トモ伊豫親王ノコトニヨリテ延引
四年二月右大臣藤原内麻呂ニ紫ノ朝服ヲ着コトヲ
ユルヌ。天皇即位以後朝政ヲ自ラ聽タニフコト懈
ラス。四方ヨリ捧ル訴狀ヲ取アツメ箱へ入。次第ニ開
召テ決断セララル。今春ヨリ不例ニヨリテ四月位ヲ太

子ニ讓ル 在位四年 年号大同

五十二代

嵯峨天皇 平城同腹ノ弟ナリ。御諱ヲ神野ト云

大同四年四月平城ノ讓リヲウケテ即位ス。平城ヲ太
上天皇ト崇メ。平城ノ子高岳親王ヲ太子トス

同八月ニ太上天皇ニ朝ス。朝覲ノ行幸コレヨリ始ル

十一月右兵衛督藤原仲成ヲシテ太上天皇ノ居所ヲ
奈良ニ造ラシム。太上天皇遷リ居タニテ是ヲ平城宮

ト申スナリ。仲成ハ太上天皇ノ近臣ナリ

弘仁元年三月始テ藏人ノ官ヲ置ク。巨勢野足藤原

冬嗣藏人頭トナル。四月渤海使高南容來ル。鴻臚

館ニテ飢食ヲ賜リ。彼國王ニ書ヲ賜テ歸ラシム

九月太上天皇ノ命ニヨリテ都ヲ奈良ニ遷サルヘキト

沙汰アリ。コレニヨリテ京中騷動ス。コレハ藤原仲成カ

妹尚侍藥子ト云者。太上天皇ニ寵愛セラレ。奈良ニ

アリケルガ。仲成其威ヲ假テ權柄ヲ振ントス。潛ニ藥子

ヲ以テ太上天 天ニ申シケル。讓位ノ後萬事御心ニ任

セス。後悔餘リアリ。再御位ニ復リタニテ御心ナキヤ

ト勸ム。太上同心ニシマス。藥子悅テ太上皇重祚シタニ

ハ。已レ后トナルヘシ。政ハ仲成ニ任スヘシト思ヒ。太上

ノ仰ト稱シテ。都遷レノコトヲ云出シテ。世ヲ騷シム。

天皇聞テ驚テ。先伊勢近江美濃ノ關ヲ守シメ。仲成

ヲ捕テ。藥子カ罪ヲカスヘ。平安城ハ萬代不易ノ都

ナリト。桓武定メラル。所ニ。今藥子太上ノ旨ヲイツハ

川。遷都ニコト寄セテ。世ヲ乱ラントス。急キ奈良ノ宮
中ヲ出ヘシトテ。仲成藥子カ官位ヲ奪ヒ中納言坂上
田村麻呂ヲ召テ。大納言ニ進メ。禁中ヲ護ラレム。太上
是ヲ聽テ大ニ怒テ。畿内紀州ノ兵ヲ召聚。川口ヨリ
關東ヘ赴ントテ。藥子ト同シ興ニ乘テ。奈良ヲ出ラレ。
天皇此由ヲ聞テ。田村麻呂ヲ大將トシテ。是ヲレツメシ
ム。田村カ望請ニヨリテ。參議文室綿麻呂ヲ相副ラ
ル。即チ宇治山崎淀ノ道ヲ遮ル。仲成ヲハ佐渡ヘ流罪ト
沙汰アリレカ。其儀ニ及ハス。斬罪セラレ。太上路次一所々ニ
官兵サヘキル由ヲ聞テ。セシカタナク。又奈良ノ宮ヘ還テ。
髮ヲ剃テ入道ス。藥子ハ罪ノ重キヲサトリテ。藥ヲ吞テ
自害ス。其同類皆遠流セラレ。太子高岳親王モ位ヲスヘ
リテ僧トナリテ。弘法ノ弟子トナリ。名ヲ真如ト改ム。天
皇御弟大伴親王ヲ立テ太子トス。御娘有智子内親王
ヲ賀茂ノ齋院トシ。伊勢齋宮ニ准ス。是齋院ノ始メナリ。
此内親王ハ才藝スクレテ。ヨク詩ヲ作レリ。

二年正月渤海使者來ル。五月大納言右大將田村
麻呂逝去。天皇甚ラレシミタマヒテ。絹布米等ヲ多ク賜
テ。宇治ノ郡栗栖村ニ葬ラレム。勅詔ニヨリテ。甲冑劍鉞
弓矢ヲ棺ノ内ヘ入テ。王城ノ方ヘ東向ニ立テ土葬ス。此人
器量骨柄タ、ナラス。身ノ長五尺八寸。胸板ノ厚サ一尺
二寸。眼ハ鷹ノコトク。鬚ハ金緑ノコトシ。怒ルトキハ鳥
獸モ恐レカクル。戯笑トキハ兒女モナツキシタフ。死スル
トキ五十四歳。十一月奥州夷賊起ル。文室綿麻呂

ヲ遣レテ是ヲ平ク。軍功ニヨリ從三位ヲ授ラル
三年二月。神泉苑ニ行幸アリテ花ヲ御覽シ。詩ヲ作ラ
シム。花宴是ヨリ始ル。天皇學問ヲ好ミ。能詩ヲ作ル。又
筆道スクレテ妙ナリ。又遊獵ヲ好ム。大原栗前水生
交野芹川大堰川方々へ度々行幸アリ。六月紀廣
濱阿部真勝等ヲシテ始テ日本紀ヲ讀シム。十月。右
大臣藤原内麻呂薨ス。歲五十七。太政大臣ヲ贈ラル
十二月。其子參議冬嗣ヲ召シテ。左大將ヲ授ラル。大納言
藤原園人右大臣ニ任ス。

四年四月。太子ノ宮ノ南池へ行幸。文人詩ヲ賦シ。右大
臣歌ヲ獻ス。五月。文室綿麻呂征夷將軍ニ任ス。此年
ノ冬。奥州夷賊起ル。小野石雄牛羊ノ革ヲ以テ。鎧ニ作

テ是ヲ討平ク

同年。藤原冬嗣弘法ト相談シテ興福寺ニ南圓堂ヲ作ル
五年四月。冬。嗣閑院ノ館ニ行幸。御製ノ詩ヲ賜ル

五月。皇子信ト弘ト常ト明ト四人。并皇女四人ニ源
姓ヲ賜ル。皇女源ノ姓ヲ賜ルコト。是ヨリ始ル。六月中
務卿方多親王右大臣園人等ニ詔シテ。姓氏録ヲ撰ハ
シム。近江國ノ稱四百束ヲ傳教ニ賜ル

六年正月。渤海國使者王孝廉來朝ス。内裏ニテ宴ヲ
賜ル。孝廉詩ヲ獻シ。祝シ奉ル。孝廉ニ從三位ヲ授ラレ歸
國。四月。近江滋賀へ行幸。七月。橘夫人喜智子ヲ
后ニ立ラル。檀林皇后是ナリ

七年二月。嵯峨別館へ行幸。文人ヲ召テ詩ヲ作ラシム

六月弘法紀州高野山ヲ開テ入定ノ地トス

九年四月内裏殿閣御門ノ額ヲ書改ム北面ノ額ハ宸筆ナリ東面ハ橋逸勢コレヲ書南面并ニ談天門弘法

コレヲ書 十二月右大臣藤原園人薨ス歳六十三

左大臣正一位ヲ贈ラル此比ハ大臣ノ任タヤスカラス

思召ユヘ太政大臣モ左大臣モ關テ唯右大臣一人ヲ

置レケルガ此後レバラク右大臣モカケテ大納言藤原

冬嗣朝政ヲ奉行ス

十年二月群臣ノ奏ニヨリテ勅使ヲ遣シ畿内ノ富者ノ

タクハ一ヲケル物ヲ以テ貧者ニ分テ是ヲ救フ此夏旱

甚レカリケレハ伊勢大神官并ニ丹生明神ニ雨ヲ祈

ル秋大ニ雨降テ止ズコレニヨリテ晴ヲ祈ル

十一年正月詔アリテ藤原氏代々ノ勳功ヲ慶美地

周公且蕭何ニ比シテ封戸ヲ加ヘ賜ル 二月遠江駿河ニ

住スル新羅人七百許謀叛シテ兩國ノ人民ヲ殺シ伊豆

ノ國ノ米ヲ盜テ船ニ乗テ海ヘ入ントス武藏相模ノ軍兵

起テ追懸悉クニ新羅人ヲ殺ス 四月大納言冬嗣

勅ヲ奉テ弘仁格弘仁式ヲ撰ス格ハ政務ノ先例ヲ考ヘ

損益レテ時ニ宜マソニ下知スル條數ナリ式ハ年中定ル

儀式ナリ淡海公ノ撰スル律令格式ヲ加ヘテ明法ノ者

學習ス律令格式ヲ以テ政ヲ行ヒソレニ背ク者ヲ律

テ罪ニ行フ本朝古ヘノ政法此四部ニ備レリ

十二年正月大納言藤原冬嗣右大臣ニ任ス 六月勅

使叡山ニ登リ傳教ヲシテ戒壇ヲ建シム 同年冬嗣

勸學院ヲ立テ。藤原氏ノ年ワカキ者ス。此所ニ置テ
學問セシム

十三年六月傳教寂ス。歲五十六天皇挽詩ヲ驟フ

十四年正月。東寺ヲ弘法ニ賜リ。西寺ヲ守敏ニ賜ル

二月。賀茂齋院有智子内親王ノ山莊ヘ行幸。花宴ヲ

設ケ詩ヲ賦セラル。内親王モ詩ヲ作ル。時ニ歲十七

三月。越前ノ國ヲ分テ。加賀ノ國トス。四月。天皇位ヲ

太子大伴ニ讓テ。冷然院ニ遷リ居タニテ。在位十

四年。年号弘仁

五十三代

淳和天皇 桓武ノ子。嵯峨ノ弟ナリ。御諱大伴ト云

母ハ藤原旅子ト云。百川ガ娘ナリ。此帝學問ヲ好シ。詩ヲ

作り又筆道ニモスグレタミフ。嵯峨ノ時ニ太子トナル

弘仁十四年四月讓リシウケテ即位。嵯峨ノ子正良

親王ヲ太子トス。嵯峨ヲ太上天皇トス。平城ヲ八前太

上天皇ト云。五月中納言良岑安世右大將ヲ兼シ

ハ。是ハ天皇ノ弟ナリ。良岑姓ヲ賜テ仕ヘ奉ル。亦藝

スグレタル人ナリ。外祖藤原百川ニ。太政大臣正一

位ヲ贈ラル。九月。太上天皇 嵯峨 嵯峨ヘ遷リタニテ

行幸ノ儀式ヲ用ヒラルベシト。當今ヨリ仰セラルトイ

ヘトモ。辞退アリテ。車ヲ用ヒス。御馬ニ乗タニテ

十一月。大嘗會ヲ行ハル。十二月前太上天皇 平城

京ニ入テ遊獵。天皇ヨリ種々ノ物ヲ進ゼラル。其供

奉ノ輩ニモ賜モノアリ

天長元年夏旱ス。弘法神泉苑ニテ雨ヲ祈ル

七月。前太上天皇平城崩ス。年五十一。十月。傳教ノ

弟子義真ヲ延曆寺座主トス。天台座主ノ始ナリ

二年四月。右大臣冬嗣ヲ。左大臣ニ轉シ。大納言藤

原緒嗣ヲ。右大臣トス。左右大臣相並テ。政ヲ行フ。緒

嗣公百川ガ子ニテ。天皇ノ外舅ナリ。八月。大學博士

學生等ヲ紫宸殿ヘ召テ。論議セシム。此以後。恒例トナ

レリ。十一月。太上天皇嵯峨四十ノ賀ヲ行ハル。是年

浦嶋子蓬萊山ヨリ丹後國ノ故郷ヘ歸ルト云ノタヘ

リ。昔雄略天皇二十二年ニ蓬萊ニ遊シヨリ以來三

百餘年ヲ歷テ歸レリ。誠ニアマレクウタカハレキト也

三年三月。桓武天皇ノ御タメニ太上天皇宸筆ノ法

華經ヲ西寺ヘ寄ラレ。説法アリ。七月。左大臣正二位

冬嗣薨ス。歳五十二。正一位ヲ贈ラル。開院。左大臣ト号

ス。十一月。弘法奏聞シテ東寺ノ塔ヲ立

四年五月。滋野貞主ニ勅シテ。近代ノ詩文ヲアソメシム

經國集ト号ス。二十卷アリ。貞主公博學ノ人ナリ。此比ハ

君臣トモニ詩文ヲ好テ。才能アル人多シ

五年二月。良岑安世大納言ニ任ゼラル。又此同時藤原

三守。清原。夏野共ニ大納言ニ任ゼラレ。政ニアツカル

九月。小野。篁。大内記トナル。是モ才智拔群ノ人ナリ

六年五月。良岑安世奉テ。諸國ノ民ヲヒテ。水車ヲ作シ

ス。耕作ノ資トス

七年七月。良岑安世逝去。歳四十六。十二月。大納言

清原夏野カ雙岡ノ山庄ニ行幸
八年。滋野貞主ニ勅シテ。古今ノ文書ヲ撰シム。秘府畧ト
号ス。二千卷アリ。レトナシ

九年四月。紫野ニ行幸。コレヨリサキ。此所ニ一院ヲ建ラシ。
屢御遊アリ。此度初テ雲林院トナシケラル。十一月。
藤原緒嗣ヲ左大臣ニ轉シ。清原夏野ヲ右大臣ニ任ゼス。
十年正月。清原夏野等勅ヲ奉テ。令義解ヲ撰テ奉ル。是
ハ淡海公ノ撰レシ令ノ注ナリ。二月。天皇位ヲ太子
正良親王ニ讓テ。西院ニ遷リ居タシ。是ヲ淳和院ト云。
在位十年。年号天長

五十四代

仁明天皇 嵯峨ノ子ナリ。御諱ハ正良。御母ヲ檀林皇

后橘嘉智子ト云。左大臣諸兄カ末清友カ娘ナリ。此帝
淳和ノ時ニ太子ニ立。天長十年二月。讓リヲウケテ。三月ニ即位。淳和ノ子恒
貞ヲ太子トス。此時嵯峨ヲ前太上天皇ト申シ。淳和ヲ
後太上天皇ト申ス。緒嗣夏野左右ノ大臣ニテ。政ヲ執ル。
天皇ノ外舅參議橘氏公ヲ右大將ヲ兼シ。武官ヲ掌シ。
△天皇屢兩太上皇ヘ朝覲シタシ。同年十一月。大
嘗會ヲ行ル。悠紀主基ノ旗ノカガリニ。梧桐鳳凰日月慶
雲西王母カ桃。連理具竹。麒麟等ノカガリアリ。
同年。初テ檢非違使ヲ置テ。參議文室秋津ヲ以テ別當
トス。此職ハ非常ヲ戒メ。法ニソムクモノヲ穿鑿スル。役ナ
リ。サレドモ次第ニ此職重クナリテ。左京右京ノ大夫ノ

掌ル。京中ノ宅地ノコトモ彈正ノ掌ル。糺彈ノコトモ刑部省ノ掌ル。訴訟判断。左右衛門ノ惡黨ヲ追捕スル役モ檢非違使。皆是ヲ合セシノ掌ル。又此職ノ下ニ看督長ト云役。六十六人ヲ置テ又諸國へ一人ツ、分テ遣ス。承和元年正月元日天皇大極殿ニテ。朝拜ヲ受タマヒ。二日。淳和太上天皇へ朝觀セララル。三日ニ嵯峨へ淳和御幸アリタカヒ二年始ヲ賀シタマフ。七日豊樂殿ニテ始テ白馬節會ヲ行ル。參議藤原常嗣ヲ遣唐大使ニ定メ。小野篁ヲ副使ニ定ラレ。其外判官録事ノ属官モ定メラル。二月。射場へ行幸アリテ。賭物ヲ設テ射藝ノ優劣ヲ試ム。天皇自ラ射タマフ。次ニ大臣以下皆射ル。三月。嵯峨太上天皇。右大臣夏野カ双岡ノ山庄へ御幸アリ

八月。久子内親王。賀茂川ニ移シ。始テ野宮へ入ル。伊勢ノ齋宮ニ備フヘキニヨリテナリ。二年正月。芹川へ行幸。天皇モ遊獵ヲ好ミテ。屢浴外へ出御アリ。三月二十一日。弘法高野山ニテ寂ス。五月。神泉苑ニ行幸アリテ。池魚ヲ捕シメテ。嵯峨淳和兩太上天皇へ進セラル。七月。菅原清公ヲ召テ御前ニテ後漢書ヲ讀シム。九月九日。紫宸殿ニテ菊ノ宴アリ。文人詩ヲ献ス。三年二月。遣唐使藤原常嗣。小野篁等ヲ召テ。右大將橘氏公勅ヲ奉テ。絹布等若干ヲ下サル。四月。紫宸殿へ常嗣篁ヲ召テ。餞シテ酒ヲタマハリ。文人等ニ詩作ラシメ。御衣沙金絹等ヲ賜ル。此次テ藤原清

河阿倍仲麻呂石川道益等入唐シテ歸朝セスレテ死
タル輩ニ位ヲ贈ラル 七月遣唐船四艘太宰府ヲ出
ケルカ風ニ逢テ飯洛

四年三月遣唐使發船此比僧圓仁モ入唐ス慈覺大
師是ナリ 九月清原夏野薨ス歲五十六

五年正月藤原三守右大臣トナル 六月清涼殿ニテ

直道廣公群書治要ヲ讀 八月丁亥釋奠尚書ヲ

講ス凡春秋ノ釋奠ニ公五經并ニ論語孝經等ヲ講セ

ラル 十二月遣唐副使小野篁病ト稱シテ路次ヨリ

歸ル是ハ常嗣オアリトイヘトモ篁ニ及ハスレカルニ常

嗣ヲ大使トシ篁ヲ副使トセラル篁満足セストイヘトモ

勅ナレハ既ニ出京ス四艘ノ船ノ内常嗣カ乗タル第一ノ

船損ジケレハ篁カ乗タル第二ノ船ヲトリカヘテ常嗣乘

ケルニヨリテ篁怒リ恨テ行ス文ヲ作テ是ヲ譏ル其

詞ノ内ニ上ヲ憚ラサル心アルニヨリテ嗟峨ノ太上皇

大ニ怒テ其罪ヲ沙汰セラル然レトモ博學大才能書

カタクソナハル者ナルニヨリテ死罪ヲ宥メ隱岐國ヘ

流サル年ヲ歷テ赦免セラレテ歸京

六年八月常嗣歸朝ス 九月參内紫宸殿ニテ右大

臣藤原三守ヲ以テ大唐勅書ヲ捧ク懇ノ仰アル常

嗣公葛野ガ子ナル父子相繼テ遣唐大使トナルコト

日本ニタクヒナキコトナリト稱美ス

七年二月盜賊所々ニ興ルニ因テ左京右京五畿七道

ニ勅ス此ヲ捕シム 五月淳和太上天皇崩ス歲五

十二 七月右大臣藤原三守薨ス八月諒闇ノ内ナ
ルニヨリテ釋奠ヲ停ラル大納言源常ヲ右大臣トス
九年春渤海ノ使者來ル四月ニ暇ヲ給テ國ニ歸ル
七月嵯峨太上天皇崩ス歲五十七此ヲリフシ春宮
帶刀伴健岑但馬守橘逸勢等謀叛ノクハタテアリ
太子恒貞ヲトリタテ申サントノ事ナリ恒貞公淳和
ノ子ニテ天皇ノイトコナルニヨリテ淳和崩ノ後互
ニダツル心アリケルニヤ嵯峨崩御ノニギレニ健
岑逸勢カク謀ルルヘシ阿保親王ヒソカニ此ヲ知テ
天皇ノ御母嵯峨ノ皇太后ニ申ス皇太后此ヲ藤
原良房ニ告テ奏聞ス即官兵ヲ遣シ健岑逸勢ガ
家ヲ圍テ是ヲ捕ヘ糺明ス又大納言藤原愛發中

納言藤原吉野參議文室秋津ヲモ捕フ此等皆淳和
ノ舊臣ニテ太子ノ方人ナルニヨリテナリ太子ハ此事ヲ
知ストイヘトモ彼等ヲ近ケ親ム罪アリトテ其位ヲ
スベリ愛發吉野秋津公官ヲ奪テ京ヲ追放シ逸勢
ハ伊豆ヘ流サレ健岑ハ隱岐ヘ流サル太子ハ後ニ僧ト
成テ恒寂ト号ス能書ノ人ナリ其後天皇ノ御子道
康親王ヲ太子トセララル

十年七月左大臣藤原緒嗣薨ス歲七十 九月對馬
嶋ヨリ奏聞シテ新羅ノ方ヨリ鼓ノ聲ヲヒタシクキ
コユルヨシ申シケレハ若不慮ノ事モアルベキヤトテ筑
紫ノ人數ヲ對馬ヘ遣シテ守ラシム 十二月文室官田
麻呂ト云者謀叛ノクハタテアリ事アラハレテ官田麻

呂ヲ捕ヘテ伊豆ヘ流ス其子共モ皆流罪セラレ
十一年正月三日天皇御母皇太后ヘ朝覲セラレ
六月日本紀ヲ去年六月ヨリ菅野高年ニ命ジ讀始フル
此ニ至テ讀了ル 七月源常ヲ左大臣トス橘氏公ヲ右
大臣トス常々天皇ノ弟ナリ氏公ハ外舅ナリ
十二年正月尾張連演主ト云者其年百十三ニテ御前
ニテ長壽樂ヲ舞其大老ニテ起居ノ自由ナルヲ感シ御衣
ヲ給ル 二月菅原是善文章博士トナル菅丞相ノ父ナ
リ是善ヲ清公ト云清公ノ父ヲ古人ト云古人ヨリ以後代
々博學大才ナリ菅丞相ハ今年生レタリ世ニ菅丞相
父モ十ク母モ十ク五六歳ノ時何方ヨリトモ十ク是善
ノ庭ニ來リレテ養テ子トスト云傳公ヤレキ事ナリ

十四年二月藤原良敏又雅樂頭トス此人入唐シテ音
樂ヲ習來レリ 五月春澄善繩御前ニテ莊子ヲ讀了
リ又漢書ヲ讀ム 十月慈覺唐ヨリ歸ル此僧在唐
十年ノ内ニ大唐武宗皇帝天下ノ僧尼ヲ禁制セラレ
ニヨリテ慈覺モレハラク還俗セラルト云傳タリ又圓
載ト云ヘル名僧慈覺ト同時ニ入唐シテ分擔唐ニ留テ
版ラズ 同月橘奈良麻呂ニ太政大臣正一位ヲ贈ラ
ル是ハ孝謙ノ時ニ押勝ニ殺サレシ人ナリ天皇御母ノ
先祖ナルニヨリテ如此ノ榮アリ 同月菅野高年院有
智子内親王薨ス歲四十一嵯峨ノ娘ナリ
十二月右大臣橘氏公薨ス歲六十五
嘉祥元年正月大納言藤原良房右大臣トナル大織冠

ヨリ七代。左大臣冬嗣ノ子ナリ。後ニ忠仁公ト申ス。是ナリ。六月豊後國ヨリ白亀ヲ奉ル。此ハ日出度物ナリ。百官祝奉ル。此ニヨリテ。年号ヲ嘉祥ト改ラル。惣ノ亀公靈物ナルニヨリテ。元正天皇ノ靈龜ノ年号モ。聖武ノ神龜モ。光仁ノ寶龜モ。皆龜ヲ奉ルニヨリテ。改元セラル。

二年四月渤海ノ使王文矩等來朝。鴻臚館ニ居ラレム。良岑ノ宗貞勅使トシテ。往テ勞フ。宗貞ハ安世ノ子ニシテ。天皇ノ近臣ナリ。五月。文矩等參内。宴ヲ給フ。其後小野篁等勅使トシテ。勅書ヲ給テ歸國。十月。天皇四十賀行ハル。皇太后ヨリモ。太子ヨリモ。様々ノ物ヲ獻セラル。十二月。洛中ヲ行幸アリテ。錢米ヲ貧者ニ給ル。

又囚獄司ノ邊ヲ巡給。在大臣良房ニ命ジテ。罪ヲ救ス。

三年正月。天皇皇太后ノミレニ。ス冷然院ヘ行幸ナリ。階下ニテ輦ヨリ下リ。殿ヘ上テ。簾ノ前ニ北面シ。跪テ禮ヲ盡シ。階下ヘ下テ。輦ニ乘テ還御。人皆其孝敬感ズ。子トシテ。父母ニツカフル。天子トイヘトモ。常ノ人ニ異ラサル理ヲ示サルナルヘシ。二月。天皇不御。三月。御歳四十一。深草ノ陵ニ葬ル。葬禮ハ遺詔ニヨリテ。輕クセラル。天皇生ツキサトクノ學問ヲ好シ。筆道ニモ達セリ。又琴ヲヒキ。笛ヲフキ。射藝ニモユテ。醫術ヲモ習ヘリ。然レドモ。天下太平ナルニヨリテ。花麗ヲ好シ。大内裏モ。此時作ラレケルトナシ。左大臣良岑。宗貞コトナル。近

臣ナルニヨリテ。髮ヲメリテ僧トナリ。名ヲ遍昭ヒ改ム
後ニ花山ノ僧正ト云ハ是ナリ。天皇在位ノ年号。承和
十四年。嘉祥三年。合テ十七年。

五十五代

文德天皇 仁明ノ子ナリ。御諱ヲ道康ト云母ハ皇后
順子。左大臣藤原冬嗣ノ娘ナリ。世ニ五条后ト申ス。順
子ノ事ナリ。天皇ハ仁明ノ承和九年ニ太子トナル
嘉祥三年。仁明崩ス。四月。天皇即位。五月。差我ノ天
皇。太后崩ス。仁明ノ御母ナレハ天皇ノ祖母ナリ。此太后
佛法ヲ好ミ。檀林寺ヲ作ル故ニ。檀林皇后ト号ス。慧覺
ト云僧ヲ唐へ遣サレテ。禪法ヲ問ス事アリ。又學問ヲモ
好テ。學館院ヲ建テ。橘氏ノ者ヲレテ。讀書セシメラル

仁明ノ崩御ヲ哀テ。居ヒセリ。程ナク崩ス。歲六十五。梅
宮ハ橘氏ノ先祖ノ社ナリ。此后ヲモ勸請ストナシ
七月。外祖冬嗣。太政大臣ヲ贈ラル。十一月。惟仁親
王ヲ太子トス。惟仁ノ母深殿ノ后ハ右大臣良房ノ娘ナ
レヨリテ。惟仁生レテ。ウツカニ九月ヲ歷テ。太子ニ立ラル
世ニ惟仁ノ兄惟喬ト惟仁トアラソロアリテ。相撲ノ勝
負ニヨリテ。位ヲ定ラルト云ハ誤ナリ。其上惟喬ノ方ヨリ
相撲ニ出タリト云ヘル。紀名虎ハ四年以前仁明ノ承和
十四年ニ病死セリ。然レハイヨク虚説ナリ。
仁壽元年三月。良房ノ館ニ行幸。櫻花ヲ見テ。詩歌ノ
御遊アリ。四月。春澄善繩ヲ召テ。文選ヲ講ゼシム
十一月。大宴會ヲ行ハル

二年五月諸國ニ甘露ノルヨシ奏聞ス。十二月參議
小野篁卒ス。歲五十一。其子孫多關東ニアリ。武士ト
ナル足利ノ學校ハ篁ガ舊迹ナリト云傳タリ。

三年二月良房ノ館ニ行幸。其家人難波ノ蔓麻呂從
五位下ニ叙セラル。六月一品葛原親任薨ス。是ハ桓

武ノ子ニテ平家ノ先祖ナリ。八月百濟河成卒。是ハ
腕タル繪ノ上手ナリ。同日僧圓珍入唐ス。智證大師

是ナリ。今年天下瘡癩ハマリテ貧賤死スル者多シ。
齊衡元年六月左大臣源常麿ス。歲四十三。七月備

前ノ國ヨリ断食ノ僧來ル。神泉苑ニ居ラシム。人皆奇特ナ
リト云。群聚ノ此ヲ見ル。後ニ聞ハ此僧夜深テ後數升ノ

米ヲ水ニテ飲ケルガ其剛ニ糞アルニヨリテ其断食ハ詐

リナルコトヲシル

二年正月奥州夷賊起ルニヨリテ近國ノ兵千餘人ヲ

國司ノ加勢ニ遣サシ。兵糧ヲモ給ル。五月東大寺ノ大佛

ノ頭自ラ地ヘ落ケレハ九月大納言藤原良相ト僧真如

トニ勅メ聖武ノ例ニカセ天下ヲ勸進セシメテ是ヲ修理

セシム。良相ハ良房カ弟ナリ。

三年七月。中納言藤原良長薨ス。歲五十五。良房ノ兄

リ。良房男子ナキニヨリテ良長ノ三男基經ヲ養テ子

トス。十一月春澄善禪ノ位ヲ晉書ヲ講セシム。同日

天皇新ニ殿ヲ作リテ庭上ニテ自ラ天ヲ祭ラシ藤原良

相菅原是善等其事ニ預ル。

天安元年二月。右大臣良房ヲ太政大臣トシ大納言源

信ヲ左大臣トシ良相ヲ右大臣トス信六天皇ノ叔父也
大友高市押勝道鏡カ以後今太政大臣則關ノ官タリ
今良房拜任此ヨリ藤原氏ノ人相繼テ昇進ス三月
良房ニ劔ヲ帶テ參内スルヲ許サル漢蕭何カ例ナリ
良房レバク辞退ス六月對馬嶋ニ亂アリテ國司ヲ
殺ス太宰府ヨリ兵ヲ遣フ此ヲ平ク十一月弘法
二大僧正ヲ贈ラル其弟子僧正真濟カ申スニヨリテ
ナリ十二月第一ノ王子惟喬御前ニテ元服四品
ヲ授ケラル良房等ヲ召テ宴ヲ給ハル天皇此皇子
ヲ愛シ給ヒテ惟仁幼少ノ内惟喬ヲ先暫ク太子ニモ立
テホレク思召トイヘトモ良房ノ威ヲ憚テカナハス其上
左大臣信已ニ惟仁ヲ太子トセラル上ハ違變ニ及フ

ヘカラスト申スニヨリテ其專ヤニヌ

二年三月京中群盜起ル坂上當道藤原有真等ニ仰テ
是ヲ捕ヘレム六月皇親ノ方ヨリ坤ノ方ヘ且時
ノ人此ヲ旗雲ト云八月天皇崩ス歲三十二帝ハ
政ニ心ヲトメテ遊獵ヲ好ニス然レトモ多病ニヨリテ
萬機ニ怠リレカ果シテ崩ナリ在位ノ年号 仁壽
三年 齊衡三年 天曆三年合セテ八年

王代一覽卷之二終

王代一覽

五十三

